

講談文庫

朝顏日記



096370-000-0

特64-137

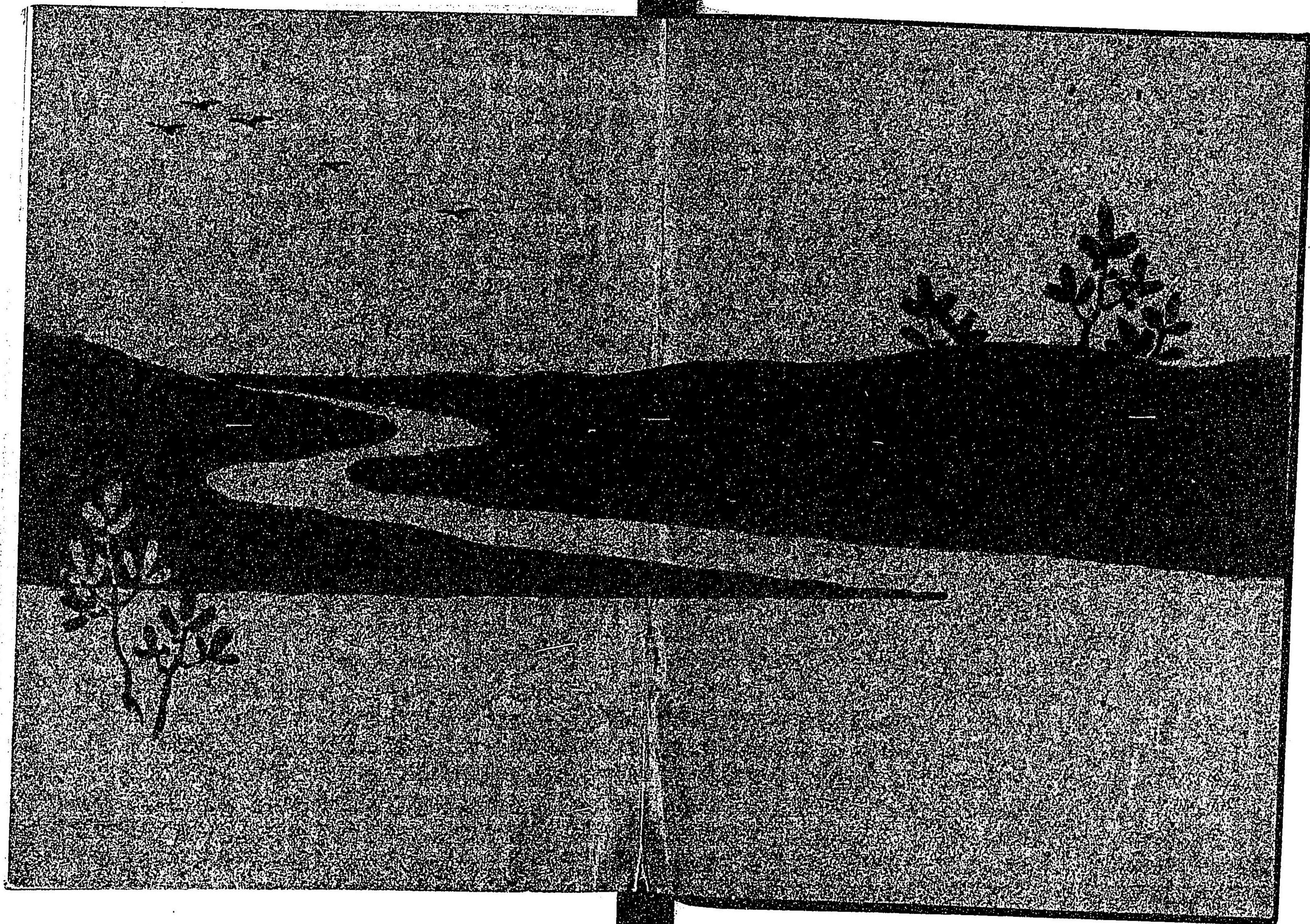
朝顏日記

講談俱樂部／編

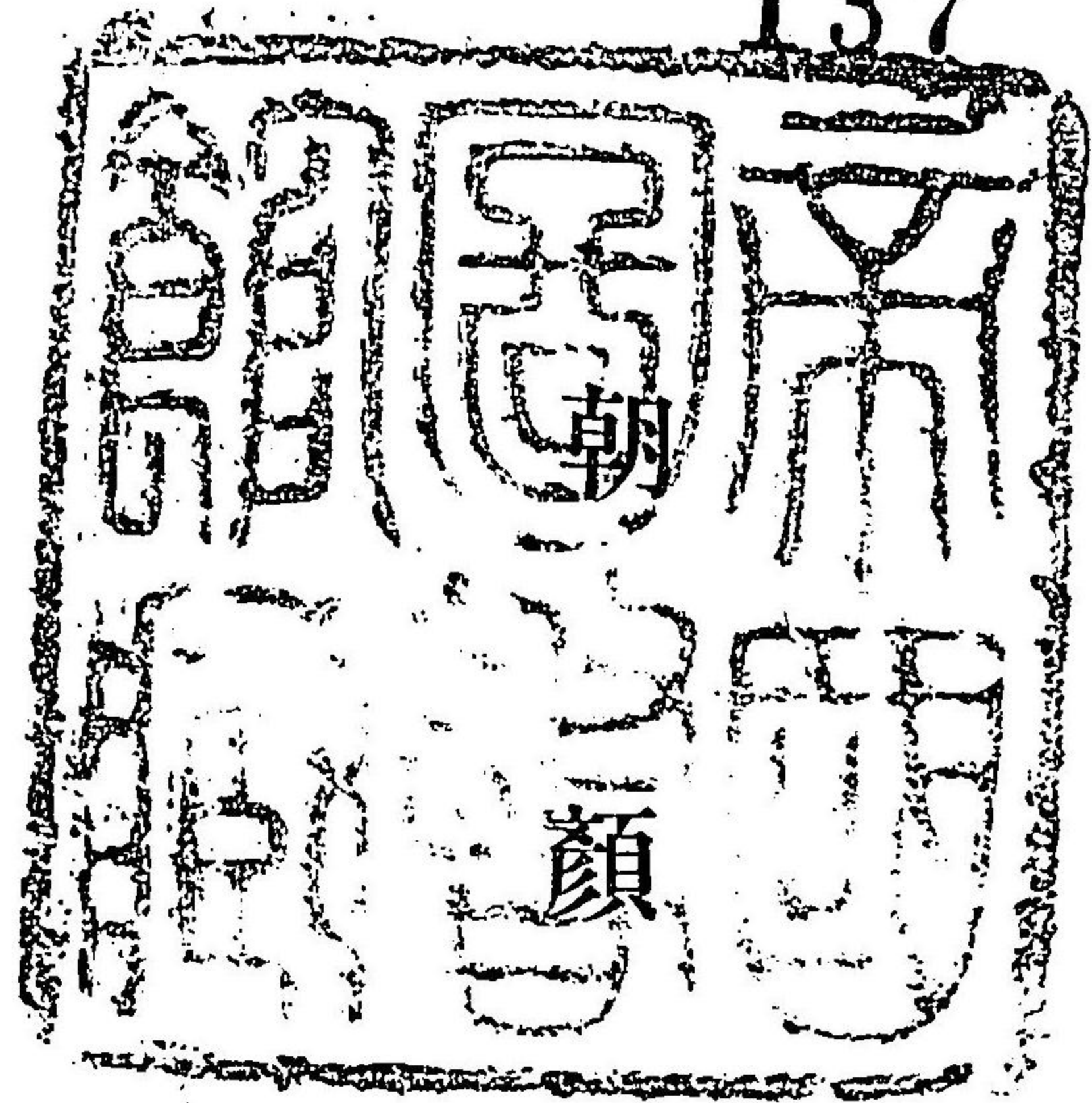
M44

DBS-0063





特64
137



日

記



序

忍ぶれど色に出にけり我戀は

物や思ふと人の問ふまで

是れ至情の極にあらずや、蓋し隠蔽し能はざるものは必らず之を口
 に素振に出すを欲すれども戀は耻かしきものなれば心を枉て包まんと
 す、而も一旦我心に同情を寄するものに接しては、滔々たる述
 懐の言停止する能はざるものあり、然るに哀しい哉世は多く戀愛と
 云へば唯冷笑一番し去るの過酷なる、戀愛に二種あり、一は肉慾を交
 へたるもの、一は満身唯愛にして絶えて獸慾の想を入れざる聖情
 なり、此愛情や社會調和の器として人間の美、自然の極致と同一

なるものとして宇宙の善なり、若し此愛なくむば人世は冷酷の争闘
場と化せんのみ、然りと雖も過たるは猶及ばざるが如しと云へるが
如く、本編の主人公深雪に至つては、餘りに戀に孝心の誠を忘れ宇
治の螢狩に遇々相見し好漢熊澤某に思ひを寄せ、暗夜片々として
舞ふ螢火の如く、獨り胸のみ焦して遂に五常の道を踏み迷ひ、鴻恩海
山も管ならざる親を棄て、乳人と相携さへて不知火の筑紫の果を迷ひ
出で路途幾多の辛苦に遭遇し遂に乳人を失ひ悲歎の結果兩眼の明を
失ふに至る亦是れ不孝の罪なりと雖も一度心に定めたる良人に
盡す貞操の道は亦感すべきものあり、而して彼れ深雪は瞽目となりて
阿部の河畔を逍遙し、甲乙の旅宿に招かれ琴を弾じて吳客越人の旅
情を慰め、僅に口を糊しつゝあり、偶々一旅客に招ぜられて旅宿

に至り、庭前に一曲を奏し暇を乞ふて戻れり、此旅客を誰とかなす、
即ち深雪が親を棄て家を棄て、日月にも比すべき双眼をも失ふに到
り、片時も胸中を放れざる意中の人、熊澤某其人なり、然れ
ども深雪は目しいて之を知らず、旅客の行李を整へて舍りを出たるの後
初めて知るところとなり、悲憤の極、殆んど狂する如く、急遽阿部の
河畔に至らんとす、時に一天俄然摺墨を流せるが如く、密雲四集
して、雷鳴とゆるくとはためき、雨沛然として降る、阿部川は爲
に川留の止むなきに至り、而して戀人は既に波濤の後にして其片影
を認めず、深雪亦狂せざらんと欲するも能はざらんや、仰いで天の
無情を怒り伏して地の冷酷を憤し茲に一場の悲劇を演ずるに至れり、
此間の消息劇に演じ、淨瑠璃に語りて、老少も是を知らざるはなし

然りと雖ども開は全編の一端に過ぎ、唯一幕に演じ一段に語りて斷續終始を明らかになさず、茲に我が講談俱樂部に於ける朝顔日記は、始末を詳らかにして餘すところなし。

噫觀すれば戀愛なるものは本來捕捉すべき現實のものに非ず、しかも現實の人を悲喜生死の境に驅使するは何たる不可思議ぞ、然れども戀には戀の道あり、道筋立たぬ戀は戀にあらず淫なり、諸子幸ひ一本を購ひて以て、本編を讀過し如何に佳境に入る個所の多きかを知れ以て序となす。

明治四十四年葉月

著 者 識

講談文庫發行の趣意

凡そ世に最も恐るべきもの、世道人心の萎靡、衰弱するより甚だしきは莫し矣然もこれ等世道人心の萎靡、衰弱を未然に防ぐには、達識なる當局者ありて、常に巧に人心を導き、一路向上、能く其の嚮ふところに向はしむ。斯くて萎靡や、衰弱や何れの里に其の風を見んと欲するも、能はざる也。

武備張り、文筆燦然として治く、一等國の文明を飾れるもの、洵に他列國に恥づるところなく、國運の隆盛眞に東洋の雄鎮たり。然も此の燦然たる文明を形成するには、唯だ所謂上流者のみによりて、形成せらるゝものにあらず。寧ろ小數なる上流者は、當面の人にあらずして、中流、及び下層社會のものが、より多く今日の文明を形成したるものたることは、少しく社會研究を爲したる者の直に會得するところなるべし。

下層生活を爲すものは、多くは世の落伍者にして、目に一丁字なきものこれあり、殆んど其の八九分を占む。これ等目に一丁字なく、時に常識の有無をさへ疑はしむるものが、何如にして文明の素因とはなりたるか、これ頗る首肯し難きものあるが如しと雖も、掌を胸にして、靜に冥想すれば、其の源因の頗る單簡にして、要領を得たるを發見し得べき也。

彼等が休日、又は雨天の際に、先づ第一に襲ふは、講談場たるを失はず。講談師來るの遅ければ、木枕を執て横臥悠々時間の來るを待つ。呆氣なるものなり而して講談師の語る所は仁義禮智、或ひは忠孝の勸善懲惡の類ならざれば武勇絶倫氣一世を掩ふの英雄豪傑の傳記を講じ、知らず識らずの間に忠君愛國の情を旺盛ならしめ、仁義に厚く、武勇を練り、元より孝は百行の基と、目に一丁字こそ無けれ、愉快に説き立つる講談師の話の面白く、深く耳に入りて、家に歸つては兒孫にこれを説き聞かす、斯の如くして講談は非常なる通俗國

民教育の一助となり、廣く深く國民の腦裡に印せらるゝと共に、其の教化の極めて偉大なるものあり。

吾人は必ずしも、これ等人心を指導するもの小説、講談のみに限るとは云はずされど此の講談が潛勢の偉大なるものありて、二十七八年戦役を始めとし、三十七八年役に外人を喫驚せしめたるものあるは、必ずや疑ふ所にあらざる也これ我日本人は、我日本人の忠勇義膽によりてのみ憤勵せらるゝの概あるが爲めならずとせんや。

されば、講談中の義勇を勧め、忠君愛國を説き、孝悌を説くが如きものをのみ撰み、これを梓に上せて廣く世に公にせんとす。目下の人心敢て萎靡したりと云ふにはあらねど、如何なる時代と雖も、常に今の世は墮落せんとしつゝありとの語を聞かざるなし。著者大いにこれを憂ひ、極めて通俗的に、然も世道人心を導くに、最も簡易なる方法を取る事と爲たり。其の撰むところのも

の著者獨特のものにして、一讀嬌夫をして起たしむるものあり。然も亦た時
 に靈妙なる人情の大紛糾を説くことなきにあらずと雖も、开は枝葉なり。
 本文庫發行の趣意は、何處までも前述の趣意なり。
 聊か趣意を述べて以て著者の意を明かにすと云爾

明治四十四辛亥年

著 者 識



朝顔日記目次

目次

第一席	熊澤蕃山の生立ち 十二歳より扈從となりて愛せらる	二〇
第二席	加藤廣忠公の寛容 蕃山肥後國を立退く	二〇
第三席	蕃山計らず備前家に仕う 主君の悪行を諫めんと國許を出發す	二六
第四席	蕃山苦肉の計略を用ゆ 遂に巧に光政に取入る	二七

第五席

蕃山諫言して光政改心す
蕃山國政を改む

.....三五

第六席

功成り名遂げて身退く
京都に悠々學舎を開く

.....三三

第七席

宇治の螢狩に深雪に逢ふ
朝顔の歌を作りて別る

.....三四

第八席

伉儷全からんとして容易に結ばず
波瀾漸く起る人情の海

.....三三

第九席

貞庵、勇仙に逢つて苦み
勇仙阿蘇次郎と偽つて恥を搔く

.....三七

第十席

勇仙恥の上に恥を搔く
阿蘇次郎、深雪不意の邂逅

.....三五

第十一席

不意の邂逅意の如くならず
風は空しく兩人を隔つ

.....三〇

第十二席

蕃山途中に勇仙に逢ふ
勇仙困窮を訴へて居候となる

.....三〇

第十三席

勇仙追はれて蕃山を恨む
雪夜蕃山酔ふて漫歩す

.....三〇

第十四席

蕃山勇仙を殺して罪なく
再び備前公に仕ふる事となる

.....三三

第十五席

蕃山變名を名乗らずして罪あり
良縁結ばれて未だ全からず

一五二

第十六席

貞庵諸方を流浪す
婦人を托されて岐路に迷ふ

一六五

第十七席

毒婦亦た涙あり
深雪邊路に迷ふ

一七七

第十八席

深雪貞庵に助られて危く
悪漢何事が荐りに密談す

一八八

第十九席

貞庵深雪を苦む
深雪福原に賣らる

一九五

第二十席

悪漢の末路憐むべし
幽魂飛んで跡もなし

二〇九

第二十一席

深雪漸く危難を免る
恩人悪鬼の爲に斃る

二一八

第二十二席

深雪尋ねる人に逢はず
盲者となつて東海道を伴ふ

二二三

第二十三席

深雪の苦心遂に空しからず
伉儷全ふして天地に榮ゆ

二四六

朝顔日記目次(終)

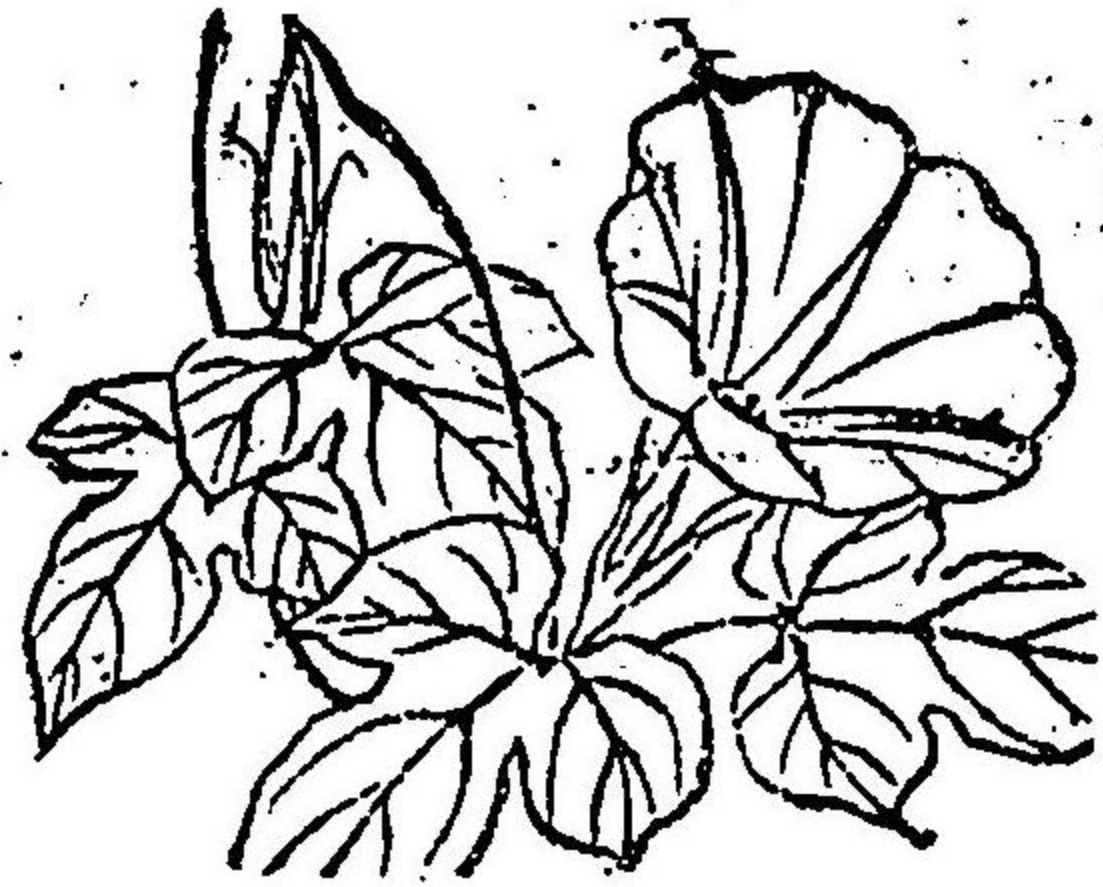
朝 顔 日 記

講 談 俱 樂 部 著

○ 第 一 席

熊 澤 藩 山 の 生 立 ち
十二歳より扈從となりて愛せらる

爰に肥後の國握田郡熊本の城主食祿七十萬石、御預り地廿五萬石合
 して九十五萬石九州一の大諸侯加藤肥後守源朝臣忠廣二代將軍秀
 忠侯の忠を貫ひ忠廣と申上げて申す迄も無く御父上の清正公は智仁勇三
 徳兼備したるお方であり升其清正公がある晩廁へ入しつた此お方は痔
 持ちで何時でも御便所が長い、テ瘡の性で便所の板へ足が付くのが氣味が悪
 いと仰しやつて高い下駄を穿て小便所へお這入んなさるが相變らず何時も便



所が長う御座い升、或る冬の事で清正公 廁へ入つしやつた外で家來共
 燭しを持って戶外に待つて居りますると聽ての事に 清正「コレヨ誰か來い」
 と被仰りになります 近臣「御用で御座い升か」と手を附く 清正「相伴士
 人を呼べ 近臣」ハッ……」と答へて直様お召しに參る 隼人即刻に參殿し
 てお居間かと思つて行くとお居間にお出でが無い御寢所かと云つて見ると御
 寢所でも無い御客間かと思つて往つて見ると客間でも無い 隼人「何所……」
 …… 近臣「廁でお召し 隼人」珍らしい事があるもんだ小便所で御用がある
 んで…… 隼人罷り出でまして御座り升何御用で御座いまするか 清正「ウ
 ム、其方組子に直助と云ふ者があるか 隼人」御座います 清正「先日相撲
 見物に予が參つた時に棧敷から下りて廁へ參つたであらう其節腹巻を着
 用して其上に着類を着して小手躰當を爲て予が 傍らを堅めて居つた者があ

つた其方何んと申すと尋れた時に下林 隼人組子直助と申す足輕と申した
 おほけんぶついりこところ 多く見物の入込む所であるに由つて萬一予に對して抗抵でも爲る者があれば
 かふ爲やうと云ふ量見で腹巻を着用して相撲見物をして居たのは天晴れな
 心掛けな者何かあつたらば取立つて遣はそうと心得て居たが殆んど失念をし
 て居つた今思ひ出だしたに由つて其方を呼出だした申々役に立つ奴だに由つ
 て取立て遣はすに由り然し餘り大身に取立てると嫉み妬みを受けて宜しく無
 い先づ五十石位に取立て遣はしたなれば宜しからう勤功もあれば又々取
 立て遣はすやうに何にも是れ 廁で呼ぶには及ぶまいと思ふかは知らんが明
 日ありと思ふ心の仇櫻夜半にあらしの吹かぬものかは何時何う成るか
 人の身は分らんものであるから今呼出だした又其方に申付けた所が明日と
 成つて今晚にも萬一の事があれば夫れ迄のことと思ひ出だしたに由つて斯の如

く其方に申付けたに由つて今晚にも其直助と云ふ者を取立て遣はせ思ひ出
 だしたから直様其方に申付ける 隼人「ハ、ア有難き仕合せにございま
 す委細畏まりました 清正「寒い所を汚い所へ呼び囃寒むかつたであらう
 予の居間に寢酒があるに由つて那れを飲んで戻り伏せる 隼人「誠に有難き
 仕合せにございます』と上のお寢酒を頂戴してお屋敷へ歸る其晩の内に直
 助を呼出だして新規五十石に取立て遣はした、是れは歴然と加藤家の系圖に
 残つて居りまする、魂しいは三界萬靈、斯の如く親が利口だから 必ず子
 が利口とは限らない其お子様の虎之助、後に肥後守 忠廣 誠に恐かなるお
 方でございました或る一日御近臣を御集め遊ばして 忠廣「予は此通り力量
 はあるし大兵ではあるし一人前の鎧では須破と云ふ時に矢玉を受け兼ね
 るであらう二領だけの厚みを付けて鎧を拵へる定めし弓矢を拒ぐであらう

と心得るが其方達は何んと心得る 家來「上は御器用であらつしやるから
 誠に結構な思召してございます』とアワヤ注文を爲やうと云ふ時に老臣の
 飯田丸兵衛と云ふ者 角「恐れながら恐かしい事を仰せられますものかな
 甲冑は運の矢玉と申します何の様に厚くいたしませうとも御運が悪るければ
 夫れ迄の事御先代清正公は虎之助と仰しやつて幼年の御頃より不思議の奇
 功を現はして和漢兩朝に英名を輝かし神にも成り佛にも成り前代未聞の
 御大將御家來を能くお使い遊ばします、好く家來を御使ひ遊ばしますれば
 其家來が殿様の鎧兜に成つて遂に傷を召すやうな事はございません何の
 様に嚴重に甲冑を遊ばしませうとも御家來の使ひやうが悪るければ家來の心
 が離れくに成つて夫れ迄の事何んのお役にも立ちません』と涙を流して御
 意見をいたした成程夫れに相違無い、國家の興廢は家來の善惡にある後にお

家を潰してお仕舞なすつた、然し此朝顔日記の話しに就ては、寛仁大度のお取計ひを遊ばした事がある、何う云ふ事かと申しますと、爰に加藤家の足輕に都善助と云ふ者がある、戰場萬馬往來の頃から加藤家に從つて居りまするんで、年齢八十歳の時に、男の子が出来た、珍らしい人、尤も刀鍛冶でも、烏井左近と云ふ人は八十一の時に男子を拵へて、夫れが新刀の國光其人の弟子が五郎正宗、達者のお方があればあるもので、八十歳の時に、儲けた事であり、其名を八十九と稱けまして、此人後に熊澤次郎左衛門了介、號を蕃山と云つたお方であり、性來發明、扱て其足輕の善助と云ふ者は、殿へ盡くのお氣に入り、何時何處へ入つしやるにも、供に連れてお出でなされる、始めての御目通りを爲たのが、十二才の時十五才で、元服を爲し、御扨從の列に加はつて、御食祿親規二十俵賜はつた、劍術は阿父さんが、戰場萬馬往來を

爲た人で、能く教へる、固より學問は出来る、後に大學者に成つた人だから、其内にも詩を作るとか、歌をよむとか、云ふ事は、名人でありました、或日の事で、忠廣公肥本の熊本隨善寺と云ふ所へお花見に入つしやいました、時しも三月の事、て荒ッポイ大將であるから、庭で相撲を取らせる、又は御扨從が腕押を爲る、夫れも終つて御好きの道だに由つて、詩を作らせました、其内に大層好く出来たのが、八十九の詩であり、まして大層御賞美の上御褒美を賜はりました、皆々羨ましき事に思つて居る、扱て御酒を頂戴爲て居る、殿様は隨善寺の和尚と、碁を打つて居らつしやる、十二三才から二十才位迄の、大勢扨從が集まつて、お酒を飲んで居る、澤山にも飲まん、お酒を戴いて、眞ッ赤に成つて、八十九が下俯向て居る時に、同じ御扨從の武勇自慢の芳松と云へる者、差俯向て居る、八十九に向つて、芳都氏尊公上の首尾の好いのは、實にお羨やましい事

でござるが某しも三十俵頂戴を爲て居るが拙者の三十俵は歌を詠んだり詩を作つたり然んな文弱の爲に貰う三十俵では無い武士の表藝たる武藝を以て上に御奉公をいたして居る者である某しは詩や歌は作る事は出来ないが武藝は一人並出来る、文學は太平の遊び道具と云ふもので先君清正は賤ヶ嶽七本槍に本田忠勝に組付て勝を制し其外山崎四國征伐九州征伐小田原征伐朝鮮征伐の時は鬼將軍と云はれて今以て彼の地では蛇の目の紋を恐れる位ぬ、是れ皆詩や歌の爲では無い武藝の爲だ去れば當地は九州第一の大將、侯惣高併せて九十五萬石官は侍従、位ぬは四位に昇進をいたされた皆是れは槍先の功だ然らば吾々の職として武藝は充分に備へんければ相成らん少々位ぬ詩歌が出来て上の通りが好いからと云つて年上の者上役の者に大きな面を爲ないやうに爲なさい』と喧嘩を吹掛けました、八十九

は黙然として下差俯向いて居たが 八十『イヤ貴殿のお言葉でござるが拙者決して大きな面をいたす譯はござりませぬ思ひ掛け無き御褒美を頂戴して皆々様の御引立てを蒙むり實に有難い事に存じます然し唯今貴殿の仰せに三十石は武藝を以て頂戴爲ると被仰いましたな 芳』去れば腕前を以て頂戴爲る貴殿は失禮ながら足輕の俸、二十石は甚はだ過ぎる武藝を以て失禮ながら貴殿は二十石の腕前はござるか 八十『是れはしたり大言には似たれども某し武藝を以ては五十石や百石を頂戴爲る腕前はござる貴殿と勝負をいたしたなら御身如きに負けを取るやうな然んな意氣地無しとは少し違ふ文武は車の兩輪の如く歌俳諧でも御相手を致す武藝を以ても貴殿方には譲る心得はござらん 芳』何を……足輕の俸の腰折れ歌、逆も武士の働きは出来まい大筒の音を聞いたならば腰を抜かし血を見たらば目を廻す

だらう早く云へば祿盗人と云ふ位いなものだ 八十「イヤ以ての外のこと
 餘事は扱て置いて祿盗人と云ふ一言は聞棄て成らん身不肖なれども二十石は
 腕前を持つて頂戴いたす 芳「何を小癩な事を申す……拙者こそ武藝を
 以て三十石を頂戴いたす太平の今日なれば詮方無い汝等はイヤと云ふ時は
 戦地に進み震つて居るだらう、モシ此言葉が残念だと思ふならば拙者が腕を
 試して遣はすイヤ庭へ出る」と血氣に逸つて血の雨を降らさうと云ふ一席は
 次に……。

○第二席

加藤廣忠公の寛容
 藩山肥後國を立退く

俗に云ふ賣言葉に買言葉元々酒の上の悪い男でありますから芳松刀を
 提げて庭へハツと飛出だして行く一同が 甲「イヤ芳松君が宜しく無い先

刻から聞いて居れば君が傍若無人と云ふものだ言語同斷重々貴殿が宜し
 く無いマア」と云つてる内に八十丸も勘辨成らんと相見へまして同じく
 庭へ飛んで出て 八十「お試し下さい御手合せをいたそう 芳「心得たり」
 と云ふ内にソレ喧嘩と云ふ騒ぎ年若の面々皆々驚いて居る内に蒼青に成
 つてチャリン／＼と双方共に火花を散して戦つて居る芳松が 芳「エー
 ……」 一聲叫んで肩口を切込んで来る奴を 八十「心得たり」ヒラリ体を
 變して空を打たせ横よりいたしてサツと裙を拂う飛上つたが間に合へばこそ
 二の太刀は脳天から鼻柱へ掛けて芳松を其所へ切倒す、ソレ喧嘩だ／＼切
 つた切られたワツ／＼と云つて何うも夫りやア引繰返るやうな騒ぎ碁を打
 掛けて居た忠廣 忠「何んじや物騒がしいでは無いか 近臣「申上げます唯
 今荒川芳松都八十丸と斯様／＼の次第でございます」と委しへ申上げた

公は少つとも驚く景色も無い流石は清正の御息 忠「然ふか……」と
 被仰つて相變らず碁を打つて居りましたが何爲る棄てても置かれないに由つ
 て夫れく取片附けましたが殿様のお覺へ芽出度き八十丸の事でありませうか
 ら猥りに老臣から切腹申付けける理山にも行かす老臣相談した加藤與左衛
 門と云ふ人御前へ出て 與「唯今斯様く八十丸は取押へましてございます
 如何なる所分に申付けませうや 伺ひ奉ります 忠「ヨシ荒川芳松が都
 八十丸に刃傷を仕掛けたのか 老臣「御意にござります 忠「八十丸が夫
 れを受けて芳松を切殺したのか 老臣「御意にございます 忠「然ふか好し
 く」と被仰つて碁を打つて居る好しくじやア何んだか分らない然ふ斯ふ
 爲る内に一石終つて御歸城と成る翌日に成つて又々加藤與左衛門御前へ出て
 與「昨日斯様く八十丸は如何なる處分に申付けたものでございませうや

忠「刃傷を申込んだのは芳松か 與「御意にございます 忠「夫れを受け
 て決闘いたして八十丸が芳松を殺したのか 與「御意にございます 忠「好
 しく」と被仰つて又御寢所へ這入つて仕舞う 與「何う爲たもんだらう、
 じやア切腹が御不承知だに由つて縛り首にでも爲たものか磔刑にでも爲たも
 んであらうか」と芳松の親戚の面々は何うなる事やらんと思つて居る。八十
 丸身内の面々も何卒助けたいものであると云ふ是れは自然の人情で故に家
 中が何所と無く騒立つて居て沙汰が付かん其所で一同心配をいたした時
 に飯田角兵衛と云ふ老臣進み出で、 角「是れはお中奥へお頼申そう」加
 藤内匠と云ふ人の娘におまさとお云ふ者がある是れが御妾に成つて居て御國
 では奥様同様の勢ひ少々御腹立の時には此おまさか御取爲しを爲れば殿
 様早速御承知なすつて下さる、ア忠廣が腹を立つた時に男が口出しを爲

れば必ず事が大きく成るおまさが取爲せばア、一面倒だ其方に任せると被仰る決て女にのろいと云ふ譯では無い女と云ふ者は取るに足らんものだと思召してマア好いやうに爲ると斯ふ云つて仕舞う男だと云ふと議論から議論に迷る事があるエ、殿様がのろいと云ふ次第じゃア無い内匠がおまさの所へ内匠何う云ふ處分にして宜しいものか和女から殿様に聞いて呉れと云ふまさ『お出でに成りましたらば伺ひませう』と云ふ事に成つて御前がお中興へお出でに成り御酒を召上つて居る時に御機嫌宜しき所を伺つて殿さま伺ひます 忠『何んじや まさ』先日隨善寺の騒動都八十丸は如何取扱ひませうや 忠『好しく女風情の其方の知つた事で無い捨て置け……』と云つて消してお仕舞ひなさる、素より御氣に入りのおまさ少々氣に逆らつたつて中々恐れるのじやア無い まさ『貴郎置け、と仰せられま

すが家中の面々如何なる事に成りますか心配いたして居ります由つて切腹申付けませうか縛り首に致しませうか 忠『ウム、其方誰かに頼まれたか まさ』實は頼まれてございます 忠『老臣共の申すには縛り首に掛まばうか切腹に爲ませうかと云ふのが某しの腹を立つ元だ祿盗人とは武士の堪念ならぬ一言堪念と云ふは侍たるべき者には成らん、成らん堪忍は何所迄も成らんに極つて居る俗に云ふ降り掛る喧嘩に被る傘は無し芳松が重々悪い八十丸は悪く無い、決闘を申込んだ者を武士たる者が嫌と云へるか考へて見る まさ』御道理でございます 忠『其故庭へ出てお互ひに切合つたは芳松が重々不覺と云ふものだ元を考へて見れば重々芳松が悪い本來ならば八十丸は百石も加増いたすべき者であるが他の者のおもわくもあれば當分は加増もいたさん何程かの手當を遣はして一度當國を立退くやうに申付

けよ時節を待つて又歸參いたす時もあるじやらう老臣共は唯嚴刑を好む
 に由つて予が心に協はん』と云ふお言葉おまさは平生の御氣質にも似合ぬ事
 だと老臣に此事を申すと一同何時然ふ御利口に成つたかと思ふやう、扱て八
 十丸を呼出だして右の趣きを申聞けると都八十丸は有難涙に暮れまし
 て 八十『誠に有難き仕合せに存じ奉りますると其所で皆々から餞別を貰
 つて當國を立退きましたたが扱て行くべき所も無い爰に加藤與左衛門の知る
 人で備前の岡山松平新太郎少將光政侯の家來に熊澤了庵と云ふ儒
 者がある八十丸改名いたして阿蘇次郎と成つて熊澤了庵の養子に成つて
 熊澤了介と改名して號を蕃山と云ふ是から朝顔の傳記に押移りまする……

○第三席

蕃山計らず備前家に仕ふ
 主君の悪行を諫めんと國許を出發す

エ、其所で八十丸何所へ行くと云ふに目的も無い加藤與左衛門と云ふ家老が
 先棒と成つて手當の金子をやつて備前美濃郡岡山の城主御高三十一萬五
 千二百石大廣間御勤め備前新太郎少將光政と云ふ、テ武藏守と任官
 を爲たいと御願ひなすつた所が武藏守は徳川武藏守であるから御許しな
 さる譯に行かない武藏守に成れない位いなら新太郎で宜しいと被仰つて少
 將の御位いでありながら新太郎少將光政、此御方の家來で儒者を勤め
 て居る熊澤了庵と云ふ者がある是れが加藤與左衛門の知つて居る人だから
 手紙を附けてやる尤も斯ふく云ふ者が行くから何分頼むと云つて手紙を
 やつてあるからエ、加藤の家に歸參に成ると云つても遠方では無し中國筋
 に居れば何にかに宜しからう是れへ御立退きなさい八十丸大層に悦んで皆
 々から金子を貰つて肥後の熊本を立つて備前の岡山熊澤了庵と云ふ人も

さく加藤の手紙でも知つて居るし直ぐ對面を爲て見ると行儀作法言葉のふしく中々の人物の様に心得た、何卒子が無いから聲養子に爲たいと思つたけれども来い々早々然んな事を相談爲る譯には行かないから先づ品行を見やうと思つて朝夕心を注げて居る所が腕前は勿論出来る中々學問は出来る其内にも詩作を好くする歌も出来る殿様の御傍に育つたのでありますから遊藝も心得て居る其所で八十九に相談を爲て了何卒當家の相續人に成つて貰ひたい何時加藤の家に歸參が成る事だか歸參に成つた所が敵と附狙う者が無いとも云はれんに由つて穩かには納まらんからと説かれて承知いたしました 八十「承知しました」と其所で君に御届けをいたし親類一同承知の上熊澤了庵の婿養子、八十九では幼名であるに由つて改名して宜しからうと云ふので熊澤次郎左衛門了海、號を蕃山、大層評判が宜しい了庵の事は

大先生と云ふし次郎左衛門の事は若先生と云つて一家中に盡く用ひられて居る時に江戸表の新太郎少將光政と云ふ御人が辻へ試し切りに出るの或は吉原町へ通うの意見を爲れば閉門に成る押込めに成る固より白痴の御方で無いが何う云ふ思召しあつての事が更に聞かない此事を聞いて了海先生其所に進み出でまして了「吾等に仰せ付けられまするやうに若手の者共も御意見をいたす、モシ御手打に成れば夫れ迄の事拙者一人で一命を抛つて事をいたしませう」年寄方も一同「何うも若年であつて未だ苦勞人とも思はれない、何したのか」と目と目を見合して居る時に熊澤了庵先生が了「イヤ若者なれども」海理非も相辨へ分別ある次郎左衛門の儀でございますから拙者が受合ひまするから一同「夫れでは………」と云ひましたので江戸表に彌々參ると云ふ事に成つて江戸へ下る此方は新

太郎少將江戸表にお出でなされて今其事を御聞遊ばして 新「高の知れ
て居る若年者何を意見立てを爲るか次第に由つたらば打ッ放して呉れや
う」と思召して居る内に江戸表のお屋敷へ着いたした然るに御届け申上げた
が二ヶ月斗りと云ふものは更にお目通り仰せ付けられない如何程名に負ふ大
學者でも御目に掛れないものは詮方が無い書面杯で差上げた所が御採用に
成る氣支い無い二ヶ月餘り遊んで居る時に當家の殿様は何がお好きで在つし
やる何がお嫌ひだと云ふ事をスツカリ自分が探つちまつて江戸にも自分が親
戚とも頼む者が居るに由つて媚諂らい居る奸人も又忠義な者も残らず心得て
居る其所で御近臣が相談を爲て 了「斯ふく何うか申上げて呉れるやうに
甲「委細承知いたした」と近習の者が承知をして居る時に一人が 甲「申
上げます江戸御國にも家中の者は畏れ多い事の上の御噂はいたしませんか

町方の者或は出入り町人が君の御噂をいたして居ります 新「何んと
云つた英雄とか豪傑とか申して居るか 甲「イエ臆病と申して居ります
新「何んで予が臆病だ 甲「此度御國表より参られました熊澤次郎左衛
門了海は大學者と承はる殿様に御目通り申上げて御意見を爲やうと云
つて居ります其熊澤に御意見を爲れて申返す見込み……勝つ見込みが
無いに由つて御逢ひなされないのだ熊澤に御逢ひなさん所を見れば殿様は
熊澤に恐れて入つしやるに違ひ無い臆病だと斯様申して居ります 新太
郎が 新「然ふか逢つて遣はそう今晩呼べ夜分逢うと云ふのも可笑な譯だが
…… 甲「委細承知いたしました」國表からポツと参つた熊澤了海
かしてやらうと云ふので金燭臺銀燭臺と云ふのを點けて女が四五十人
揃ひの衣類に揃ひの頭揃ひの帯を召めて伊勢音頭と云ふ者を踊つて居る殿

様が金の盃を取つて倭人原を傍らに置いて御酒を召上つて居る女達は一同國表から御意見に來た人があるそうだ 甲「何んと云ふ人だ 乙「熊澤次郎左衛門了海と云ふ大學者だそうでございます 甲「チャクマア色の眞ッ黒けの髯つ面の鬼の様な鐘馗の様な男だらう名からして次郎左衛門だの彈正だの支蕃だの支左衛門と云へば何の様な男やらんと思つて心配を爲て居る所へ髪を江戸風に結つて年齢廿一二歳色白にして淡白とした誰が見ても美男流石の女中衆も兩側に並んで踊りを踊つて居たが各々顔を見合して手を動かすのを忘れる位い殿様も恐ろしい綺麗な奴が來たと男ながらも惚れく爲る位い御椽側へ手を突て叩へて居ります 新「了海とやら近う進め 了「始めまして御目通りを仕ります 御安寧の御尊顔を拜し恐悦至極に奉存ります 新「ウム幾久しう見知り置く 左りの方に一刀を

提げ諫言立てをすれば切つて棄てんと身構へて居らつしやる 新「其方は酒を飲むか 了「大好物にござります 新「一盞遣にそう 金長柄の鎧蝶御定紋の御彫りのいたしてある御銚子を持つて女中が酌を爲る口を付けると云ふとスーと水を飲むやうだ七五三と云つて三合五合七合の盃一番下のを取つて下すつたのが七合 新「サ是れで一盞遣はすであらう 又七合の盃を頂戴してなみくと飲んで仕舞つた殿様ア驚いた大變な酒ツ喰ひな奴だと思召して 新「熊澤 了「へエ 新「其方は予へ對して諫言をいたそうと云ふ心得で今度江戸表へ參つたと云ふ事だが左様か 了「目縁をホノリ櫻色にして兩手を突て居たが 了「恐入りました然し聰明叡智に渡らせられる我君に對して愚痴短才の拙者中々以て御諫言杯思ひも寄らぬ事でござります俗に申します釋迦に説法實は殿様に御目通りも

いたしたく又江戸見物も仕りたく御意見をいたすと申しませんければ江戸
 表に出て参る諺に相成りませんに由つて老臣方に申して江戸表に参りま
 した 新「ウム 了」實は御目通りもいたしたく江戸見物をいたしたい所存
 でございます」忠臣の面々驚いた一同「夫れじやア何にかい御意見はつけ
 たりで江戸見物に来たのか何んてへ事だらう 新「左様か好しく」殿様少
 し御顔が和らいで 新「其方江戸表に於て定めし徒然であつたらうが何か
 面白い事があつたか 了」ハイイヤモ一面白い事だらうでございまして
 新「備前の岡山に戻つてアイと出て來たら定めし將軍家の御膝元驚き入
 つたらう徒然の折何をして居つた 了」吉原町へ参りました」殿様大き
 に悦んで 新「然ふか近う進め、夫りやア至極面白い吉原は何屋へ登樓をい
 たした其方の事だに由つて小格子又は町並なぞへ上つた譯ではあるまい先づ

第一に三浦屋四郎右衛門か 了「イ、エ違ひます 新「山本屋助右衛門か

了「イ、エ 新「玉屋山三郎か 了」然ふでもございません 新「俗に半藏

松葉と云ふ松葉屋半藏か 了」夫れでも違ひます 新「何所だ 了」扇屋と

申する家へ登樓 仕りました 新「扇屋か 了」中々上は吉原町の事

を委しう知つて入つしやいます 新「此方は鴉だ、見番の藝者が何んと云つ

て横町／＼の潜りの藝者が何んと云つて何所の若い者が何んと云ふ事迄

心得て居る吉原で知らん事があるなら予に聞け、予は折々扇屋へ登樓いた

して予の相方と申すのは玉琴と云ふ其女を其方買つたではあるまい 了「兼

て承はりましたに由つて玉琴は買ひません 新「誰を買つた 了」玉とじ

と申します者を買ひました 新「ウム玉とじか那れば何うも美くしい當年十

九歳だ、彼れは大和郡山出生の女だ身の背は高し其の毛はツヤ／＼

といたして中々座敷の面白い女だエ、多くは始めて江戸表へ参つてポツト
 デの其方の事だに由つて嫌られたらう。了「なか／＼其晩は快晴でござい
 まして 新「イヤ雨じゃア無い、手當の宜しい事をモテタと申して手當の悪
 い事を觸られたと云ふ、由つてふられたらうと云ふのだ何うじや 了「然ん
 なら申上げますなか／＼持てました方でございます 新「夫りやア何うも感
 心だ何う云ふ工合に持てた 了「先づ其部屋へ通りまして拙者は両手を叩へ
 始めまして御目通りを致します拙者は備前美濃郡岡山の藩…… 新「コ
 レ待て／＼女郎買に往つて國郡迄も名乗つたのか 了「へエ松平新太
 郎少將光政の家來熊澤次郎左衛門了海、號を蕃山と申します、御近づき
 に成りました 新「何もコレ女郎買に往つて主人の名前から其方の號まで
 申さんでも好きそうなものだ夫れから何うした 了「御主人様は毎度手前方

へお遊びに御出でに成ります杯と申して實に其話しが面白うございました其
 上怪からん婦人でございまして私共を夜通し導かしません 新「ホー持て
 た方だな夫れから何うした 了「後朝の別れに相成りまして私を送つて参
 りまして是れ切りお出でが無ければ……妾は焦れて死にますから御近い内
 に是非来て下され、とさめ／＼と涙を流しました』とすら／＼と述べまし
 たが、續きは次回に詳しく……。

○第四席

蕃山苦肉の計略を用ふ
 遂に巧に光政に取入る

すると光政公は 新「待て／＼主人の前へ出て女郎の惚氣を云ふ奴がある
 か然しなか／＼面白い奴だ、予は折々玉琴の所へ参るに由つて連れて行
 う 了「是非共御供を願ひます 新「ヨシ何か其方は遊藝があるか 了「聊

か、古仕りました。新「コレ琴を出せ〜」無理な事を被仰つて三味線位
 い弾く者はあるが琴杯を知つて居る者は無からう並通例の女でも三味線の
 糸道は明て居るが琴を知つて居る者はありません、況てや男是れの弾ける道
 理は無いけれども熊澤困らない十八番浪返しまで知つて居る男だに由つ
 て琴を調べる其聲の凛々として響き渡り實に谷の鶯の初音を囀るやう海底
 にあつて龍が吟ずるやう、跡は三味線をやれソレ長歌だ太鼓だ、とカツポレ
 チツペケペイカラクリの真似から淺草公園の女の力持ちの真似まで爲た
 サア光政公は御意に叶つて熊澤〜とおつしやつて其晩は御馳走に成つて
 歸る、去れば是れから御機嫌が悪いと熊澤が出れば御機嫌が直る位、國が
 ら好い幫間が來たと思つて新太郎様ア悦んで居る御家來の面々呆れて仕
 舞つて ○『大變な奴が來た殿様を一日〜に悪く爲てしまふやうなものだ』

怪からん事だ』と案じてゐました。所が或一日新太郎が 新「熊澤近う進
 め」差向ひで 新「其方に一大事の事を申聞ける 熊「何事にございませうか
 新「予は折々この本町筋から九段牛ヶ淵近邊に辻切に出る試し切りに出
 るが、其方試し切を爲た事があるか 了「ございませう國表でも試しまし
 たが江戸表へ參つても折々一人二人づゝは試しました試し切の味を覺へます
 と竹刀木刀の勝負をいたすやうな物ではございませぬ 新「夫りヤア何う
 も……其方は何でも嫌と云ふ事は云はぬが面白い奴だ今晚はモ一不可から明
 晩あたり試し切に參らうと思ふから同道いたせ 熊「委細承知いたしました』
 險囁な人が集會つれた、翌日に成ると云ふと僅た二人御忍びでづらりと大名
 小路の御屋敷を御出なすつて那方此方と諸方を歩いて飯田町の堀留めに掛つ
 て大木の陰の所へ兩人待つて居る 新「サア熊澤予が誰か來たらば初太

刀を切るに由つて其方二の太刀を切れ 熊「委細畏まりました」サア待つてもく來ない、所へ二人の婆アさんが褌取上げてトットと來た熊澤が 熊「來たく 新「那れを切らうじやア無いか 熊「イヤ那れは御止し遊ばせ、先づ私が見受けました所は彼れは取上げ婆ア産婆でガス出氣付いたとか云つて知らして参りましたに由つて彼れは産婦人の所へ馳付けて参る者 新「成程 熊「夫れを御切り遊ばすと産婦人子供に如何なる間違ひがあるかも知れませんが一人を殺しまして三人の一命に及ぼすやうな譯でございませうから彼れは御止し遊ばした方が宜しうございませう 新「成程夫りやア道理千萬だ其所に氣が法なかつた、然んなら止そう」又暫く待つて居る所に提灯を持つて 藥箱を引擔いで醫者体の者 新「來たくく 那れは熊澤何うだ 熊「那れは不可ません彼れは病人の所へ行く醫者でガス 新「夫りやア誰か

見ても醫者だ 熊「モシ此者二人を切殺して其病人に及ぼすやうな事がありましたしては大變でござる醫は仁術 長袖でガスから御止し遊ばした方が宜しうございませう、切る者が外に無いではございません此方から抜て掛り逃げ出す様な者では詰りません抜いた時に向ふから向つて來るやうな者で無ければ詰りません逃げるやうな者では試した内に這入りませんから 新「成程夫れに相違無い」今かくと云つて居る所へ十五六人ドカくやつて來る 皆劍術の夜稽古に往つた歸りのやうな風でございませう 新「熊澤來たぜく何うもソツと申せばガツと申すとか云つて醫者じやア不可ん取上げ婆アじやア不可んとか云つて居たが此りやア又大勢過ぎる 熊「此位ぬな大勢の中へ切込まなければ眞實の手の内は分りません 新「然んな無理な事を申して 甲「兄上々々 兄「何んだ 甲「何んでも此邊は試し切りが出るく」と云ふ

事であつたが出ないじやア無いか 兄「ナニ餘まり大勢揃つて来たから出ないのだらう何うだ別々に成つて歸らうか 乙「然ふさ別々に成つて往つたらば出るかも知れない向ふの奴も大勢じやア出ない毎晩く歸り掛けに出たら切らうくと思つて居るけれども何うも斯ふ出なくつちやア詰られへ、折角汗水流して稽古をして居ても竹刀木刀じやア詰られへ、人を切れば腕が上がるよ云ふが眞實に出れば好いなア 丙「出れば好い」新太郎様が
 新「熊澤く 熊へエ 新「此りやア危険だ向ふの奴に試し切りに爲れるやうなものだ反對にやられちやア堪らん 熊「ナニ出ます」と出やうと爲るから 新「コレ止せ白痴な事を爲るな 熊「イエ御心配御無用でございます」と突然に熊澤了海刀の柄へ手を掛けるが早いから突然に大勢の中へ飛込みました 一同「ソーラ出た」と云ふと大勢の者は一邊はバラ／＼と四方

へ散つたが見れば一人何んものかはと各々一刀を抜いて切込んで来る火花を散して戦かつて居る新太郎様ア見て居たが 新「何うも熊澤へへ奴は豪い奴だ」此りや何うも危険い段々切立てられて来るやうだ私が此所に居るに由つて私が引上げたらば家來の者も引揚げるだらう、宜しいと思召したから大音を揚げたが熊澤へへ譚に行かないから 新「引揚げる予は引揚げるに依つて其方も引揚げる」と被仰つてドンくと逃出した後姿が見えなくなつた時分に 熊「誰方も御怪我が無かつたか 甲「イヤ御苦勞様で」是れは熊澤が頼んで此所へ出して置た自分の親類だの叔父斗りだ此れじやア怪我ア爲る氣支は無い 熊「誰も怪我が無かつたか 甲「別にござらん 熊「夫りやア結構……」 乙「兎に角又途中で試し切りに出られても困るから皆んな一緒に歸らう」と揃つて歸つて仕舞つた、殿様はドンく御屋敷へ歸つて來

て御酒を召上つて居る所へ熊澤が歸つて来る、一同人拂ひを申付けて 新
 何うした熊澤 熊唯今立歸りました 新其方は無法な奴だそんな大勢
 の中へ飛込んだが別に怪我は爲なかつたか 了少つとも怪我はいたしませ
 ん 新夫れは好かつたが切つたか 了四人は確かに切りました一同の者
 は皆チリ／＼バラ／＼に成つて蜘蛛の子を散すやうな事に成りました 新
 然うか結構／＼……サア／＼酒を飲め／＼其方は中々豪い奴だサア愈々
 殿様の氣に入つちまつた 新能く其方は怪我を爲なかつたな 了へエ多
 くの中へ飛込んで怪我を爲ない傳授がございます 新ハア傳授があるのか
 熊ハイ 新夫れを教えて呉れ 新此頃にお教え申しませう 新然ふ
 か何うも有難い此傳授は雑作無い誰が爲たつて出来る親類の者と相談を
 してクルでやれば決して怪我はいたしません 新時に了海久しく玉琴の

所へ参らんに依つて今晚は参らうと思つて供いたせ 了誠に有難い仕合せ
 と是れより扇屋へ参つて熊澤次郎左衛門了海が殿様に御意見の件り烏渡
 ……

○第五席

蕃山諫言して光政改心す
 蕃山國政を改む

其所で備前公の御供をいたして了海は扇屋へ参る敵女は玉琴熊澤の敵女
 は玉とじ御家來も夫れ／＼敵女がある扱て是れだけの多藝の熊澤だに依つて
 定めし面白からうと思ひの外黙然として居て少つとも面白く無い玉琴も平
 生と違つて更に浮立ちません濟まして居る備前侯別に格氣を起したと云ふ譯
 じゃア無いが面白からんに依つて 新サア寢やうと被仰つて御便所へ入
 つしやる、勿論玉琴と御添寢を爲る夜も次第に更け渡り今迄賑ふたる不

夜城の吉原も流石大ビケ過ぎと相成りましては一時人足が留りまする餘まり
 淋しいから不圖目を覺して 新「何時かしらん」とヒヨイと傍らを見ますと
 玉琴が頻りに殿の寢息を窺つて居りまする 新「ハテ氣味の悪い事だ」と思
 召して居るとスーツと其座敷を出て行くハテナと思召して居る 新「妙な真
 似を爲るが厠へでも行くのか厠へ行くのに寢息なんぞを伺がわなくつても好
 さそうなものだ」と狸寝入りを爲て入つしやる暫く経過とヒソ／＼話し聲が
 爲るに依つて御寢所を御寢衣の儘お出なすつて女郎屋の二階と云へば又物を
 持つて上がる事は出来ないけれども御自分には短かいのを懷中に持つて入つし
 やるから夫れを懷中へ確乎と入れてズーツと往つて見るに好い花魁に成ると
 三間も四間もある第一番に居間客間寢所茶の間座敷新造子供居る座敷は
 三間位ぬはありまする、何をして居る事か家の様子を聞いて見るに正面の

所に熊澤が座つて居て其前に玉琴が座つて何かヒソ／＼話しを爲て居る
 新「ウン扱ては次郎左衛門は予に内所で玉琴に横箱を入れたのか知らん不埒
 な奴もあるものだワイ」と思つて居る内に青貝の硯箱を取寄せてストラ／＼
 と玉琴が認めたのを熊澤是れを見てニコ／＼と笑つて居る又了海がスラス
 ラと書くのを見て玉琴押戴き御辭儀を爲して居るスルと又玉琴が認めて
 了海の前に出す了海がニコ／＼笑つて居る 新「ハテ扱ては手を憚かつて居
 るに依つて委しい話しが出来ないから筆談をいたして居ると見える憎い奴
 だ」と御怒りの餘りに足を揚げて蹴拂つて其所に入る驚いて兩人跡へはつ
 と飛上つて前にあつたものを懷中いたして後へ下がり其所に手を突て居る、
 新太郎様が 新「汝伎辨利口を以て人を欺し浮川竹の流を踏ぐ浮れ女な
 りと雖も此場に斯様な事をいたす上は最早棄置く譯に行かん用捨無く屋敷に

引立て目に物見せて呉れるに依つて覺悟いたせ』了海が『這は以ての外
 の仰せ何んと申譯けのいたしやうもございまんが然し所謂無して不義を仰せ
 られましては了海甚だ迷惑に存じます 新『黙れ不義を以て不義と申すに
 何んの仔細がある汝等兩名聲を高くして話を爲れば他聞する事を恐れ
 て筆談いたしたであらう夫れでも不義では無いと申すか苦しく無い 園中に
 唯今隠したる所の筆談書を此所へ取出だして潔白を見せろ』玉琴默然
 として手を突き差俯向いて居りましたが 玉『夫れ斗りは御免を蒙ります
 る 新『奈は見せられん 玉『譬へ一命を召されるとも是れ斗りは御覽に入
 れられませんか 新『去れば熊澤見せる 了』拙者とても御覽に入れる次第に
 相成りません 新『ソレ見る予が目通りにて開く事が出来んとあれば即ち艶
 書であらう、艶書で無ければ何んだ是れを以て不義と申した予が無理か……』

誰か参れ 臣『ハツ……』と云ふと家來の面々七八人バラ／＼と其所
 へ来て熊澤玉琴の周圍を取巻きました玉琴霎時と制して 玉『先づ御待ち
 遊ばして下さいまし、夫れ程御怒りがございしまするなれば御覽に備へます御
 笑ひ草と心得ましたに由つて一旦は辭しました然し斯まで仰せあれば御覽に
 入れまする憚りながら此書を……』と懐中から取出だす 了『今は詮方が
 ございませぬ』と熊澤も其所へ出す光政公手に取上げた所か立派に楷書で
 書いてある文字は分つて居るが意が通じない玉琴が認めたのか女にしては美
 事なもの如何程手が好くつても分らないから詮方が無い 光政公成程兩
 人の筆談いたしたのは是れではあるまい 了『如何やうに御吟味がございまし
 ても是れより外にはございませぬ 新『然らば認めて見る 玉『長まりました
 た』直ぐに其通りに認める 新『ウムー然らば何んで予の目を忍んで斯の如

きことをいたした。玉琴が『玉』斯相成りますれば一通りお話しをいたしま
 す了海先生が當家の玉とじ方へお出でに成りますのを幸ひ早速私が詩を作
 りまして先生の添削を願ひました久しくお出でがございませぬ今宵入らせら
 れましたのが何より幸ひと心得て先日作りました拙無き詩をお直し下さる
 様にと先生に差上げました然るに熊澤先生叮嚀に私に御教え下さいまし
 た是れは私の作りました詩でございませぬ夫れを不義と仰せられますれば誠
 に迷惑 仕りまする御怒りの解けますやう何卒御了見を願ひます 光政公
 ハラ／＼汗を流して 新『了海 全く夫れに相違無いか 了』毛頭夫れに相
 違ございませぬ…… 新『ア一赤面の至りである一國一城の主といたして
 唯今此婦人が認めたる詩が分らんと云ふのは盲目同様 面目次第も無い事
 である一夜の夢に凝り源平藤橘四姓に枕を替す君傾城に斯様な學者があ

る女の爲に家政を今日迄亂したる段面目次第も無い今晚より熊澤其方
 を手が教師と頼み學問をいたすであらう玉琴儀は落籍いたして遣はすに出つ
 て身分を取調べるやう予は是れより歸る 一同『ソレ御立ち』と云ふので直
 ぐに丸の内の御屋敷へ歸る、玉琴及び熊澤了海先生の悦びは幾干か莫
 大の金子を以て玉琴と云ふ者を身受けをして改めて御妾と云ふ事にして差上
 げる玉琴は未だ學問は無いから備前新太郎は了海先生を御相手に爰に一生
 懸命に學問をなさる武があるから豪傑とは云はれない文武兩道に達して居
 るから眞の豪傑とも云はれれば英雄とも又云はれるのです、其所で熊澤が萬
 事取扱ひにて倭人を遠ざけ忠臣を近付け今日迄の御家政を殘らず改める
 事に成つて扱て殿様に向つて 了『實は我君が女色に溺れて居らせられる
 に由つてなか／＼突然拙者共が罷り出でまして御意見を申上げた所が君が

御採用被下べき筈はございませんに由つて始めは君の御心に叶うやう試し
 切りをいたしたのも則ち皆我々親戚の者を喋し合していたした仕事であり
 ます斯して誰は忠臣、誰は佞人と云ふ事を残らず探りましてござります
 新「然ふか 了」過ちと知つて改めます時は善も大いなること斯様く遊ば
 しまし」と今迄閉門杯いたして居りましたる所の忠臣は残らず差許と
 なり面々召出だしと成つて御褒美を下さる時に熊澤が又 了「申上げます
 たまこと 玉琴は遊女でございませぬ何も那れが學者と云ふ次第ではございませぬ、實
 は私が十斗り詩を教え遣はしました御前様に御意見をいたそうと云ふ計
 りやくに遣はしました 新「然ふか然ふして見れば其方もなかく山師だ
 了」へエ恐れ入ります……金子を遣はして親許へ御下げ遊ばして宜しうご
 ざいませう 新「然ふいたそう」其所で此れは莫大の金子をやつて親許へ下

げ遣はしましたから玉琴は御暇に成る萬事政事を熊澤に御任し遊ばしました
 に由つて江戸、國とも忽ちに安泰に成る、其所で功なり名遂げて身退くは天
 の道なり春は夏に譲り、夏は秋に譲つて四季と云ふものが極まる、出世をし
 た人褒美を貰つた人は嬉しいけれども切腹に成つたり、縮尻つた人達は幾分
 か怨む其所で熊澤が退身をしやうと考へたに由つて 了「三ヶ年の間學文
 修業の其爲に御暇を頂戴いたしたい」と申上げたがなかく光政公承
 知爲ない、又願う 新「去れば國の養父と相談を爲て見やう」との御挨拶熊
 澤先生面倒だから重役の所へ御暇を頂戴したいと云ふ書付けを残し
 て金銀には構はない人でありませぬから終々江戸を立つて仕舞つた

○第六席

功成り名遂げ身退く
 京都に悠々學舎を開く

京都までお話しもなく三條大橋の紅屋と云ふ旅宿屋へ逗留をして名所舊蹟を見物をして一日清水の観音へ参詣をして音羽の瀧或は清水の櫻諸方見物を爲て居ると後から 甲「先生……熊澤先生じゃございませんかと聲を掛ける者がある回顧つて見ると黄八丈の衣類に黒紋付の羽織を着て醫者体の坊主でありますから 了「誰方 甲「エ、誠に先生暫くでございしました私には備前岡山貴郎様の御屋敷の三町斗り先きに屋敷がございまして萩野勇庵の内弟子でございまして立花貞庵と申します 了「チ、然ふく……然ふ云へは萩野先生の家の何かい貞庵さんかい其後は久しく御目に掛らない何うして和郎何にかい此京都に来てお出でかい 貞「エ、彼の地に居ります時に大きにホロを出しまして當所へ逃げて参りまして師匠さんのお蔭で此地でマア醫者をして居ります然るにマア鳥渡した病人

を手に掛けました所が鹽梅好く全快したもんですから夫れからパツと評判に成りまして唯今の所では四條畷に諸住居をして居ります臆て國表に詫をして歸る心得でございまして那の通り大先生は物堅い人ではございまして夫れに就きまして悴の勇仙は白痴野郎モ一少々の間餘炎を抜いてと斯ふ存します其内に段々日も経過しますが然し何爲る醫者で家業に成りますから此地に足を止めて居ります先生は御國へでも御登りでございまして了「イヤ少々仔細あつて備前の家を退身しました 貞「ハア御婦人か何か出来たんでございませう貴郎の方では構はない氣でも御婦人の方で打葉つては置きませんからアナニ御若い内は二度とございまんから何んでもなざる方が好うございませう私のは少々風の悪い事をいたしました了「風の悪いと云ふのは何んだい 貞「ナニ少々悪い事をいたしました唯今先生何

所に入つしやいます 了『私は三條大橋の紅屋に止宿いたして 貞』ア、
 左様で……何んと先生さん私方へ入つしやいませんか 了『ウん夫れば
 恰好宜しいなア 女房があるかい 貞』イエ 女房はございません僅た一
 人者でゲス私はマア大概他行いたして居りますから 藥箱が留守番で至つ
 て氣易い者でございますヨ 了『私も金子が無いから何時までも旅宿屋に
 居る譯に行かない夫れじやア和郎の所へ厄介に成ることに爲やう 貞』御荷
 物は何にかい澤山ありますかい 了『イヤ荷物と云つた所が別にありやアし
 ない宿屋の勘定を拂へば宜しいので 貞』宿屋錢ばかりでございますか
 了『然ふさ 貞』旅宿錢なんぞは拂はなくつても宜うございます 了『然ん
 な風の悪い事を云つちやア不可ない私も熊澤次郎左衛門了海だ 貞』成程夫
 れじやア拂つて行きませう』是れから紅屋の家へ往つて勘定を拂つて 貞』

サア御一緒に参りませう』と道々色々話したを爲ながら 了『和郎は何に
 かい師匠さんの所を風の悪い事を爲て逃げて來たと云ふか醫學の卒業でもな
 すつたのかへ 貞』ナニ卒業なんぞ爲やア爲ません醫者と云へば醫者でござ
 います私が匙がありますから首が胴に付て居りますが此地へ來て人を何人
 殺したか知れやア爲ませんマアマア判断取り嫁取り夫婦の媒酌地面の賣
 買、然んな事をして今日を送つて居りますんで 了『ハア然ふかい夫りやア
 氣樂で好いねへ 貞』へエ……』貞庵心の内で 貞』先づ此先生を連
 れて家へ歸つて居れば先づ此先生なかくの先生だから弟子が澤山付く先
 づ此人なら食客に置ても損は行かれへ』と云ふ了見なんだ 了『時に貞庵和
 郎悪い事をして國表を逃げて來たと云ひだが備前の岡山で人殺しても爲
 たのかい 貞』イエ人殺しなんて然んな悪い事はいたしませんヨ 了『何を

して来たんだい 貞「ナニ師匠の悴に勇仙と云ふ白痴野郎がございます其
 奴を誘ひ出して私が遊びに参りまして終々マア行詰つて仕舞つたもんでござ
 いますから先生の家の物を擔ぎ出して酒を飲み終々木が割れましたから勇仙
 の着物印籠お金子を少々借りまして……」 了「借りたんなら別に仔細は無
 いじやア無いが 貞「ナニ夫れが勇仙に掛合つて借りたんじやア無いので黙
 つて持出したんでございます其故マア岡山へ歸り悪い譯なんでゲス 了「成
 程 貞「先生一文もございませんかい 了「一文も無い 貞「好うございま
 す私が何うにか爲ますから』と四條 暇の自分の家へ連れて来て貞庵が何う
 か斯うか喰べさして置きまする時に熊澤次郎左衛門と云ふと新太郎様か迎
 ひが来るかも知れないから野尻阿蘇次郎と云ふ名前に成つて今日を送つて居
 りまする内に貞庵が 貞「私の家に野尻阿蘇次郎と云ふ學者が居る實は大し

たもんだ』と觸れて歩くもんだから役人の悴、大家の息子さんは申すに及ば
 す来て見ると大層な人で文武兩道とも秀で、居るから段々にお弟子が殖て
 来て此頃では貞庵の家が手狭に成りましたから下川原と云ふ所へ家を立て置
 に今の所では安泰何所へ勤めやうと云ふ主人も無し、貞庵も悦んで先生
 が小遣を呉れと云へば 貞「畏まりました』と云つて跡は皆んな自分の懐中
 へなぐり込んでしまつて如何程小遣ひを使つて如何程で着物を買つて呉れた
 のだが自分は喰つて學問を爲て居れば好いと思ふから一向然んな事は無勘定
 だ貞庵は大層に悦びまして 貞「此先生が五年も家に居て呉れば乃公
 が好い正月が出来る、忽ちの内に土藏を立て見せる』と悦んで居ります
 ると一日弟子の植村馬場之丞 足守忠吾と云ふ二人が 甲「先生今日は……
 ……了「ナヤ何うしたい 忠「今日先生 私共が参つたのは外じやア

「ございませんが今年は大變に宇治に螢が生きました近年に珍らしい位ぬの螢
 大層暮れ方から人が出るそうですが貴郎は物見遊山と云ふと嫌だ〜と被仰
 いますか 兩人で見物に参らうと存じまして先生如何なものでございませう
 了」夫りやア宜しからう花見と云へばほりだらけに成るし雑沓して不可
 外の事ならお断はり申すが螢は大賛成だ」二人は大きに悦びまして早速割
 子酒の仕度はしてあるから京都の下川原から宇治迄は餘程道はあるが途中に
 もお話しも無く宇治橋へ来て見るは成程歌人もあれば俗人も出る何うも其賑
 ひと云ふものは大したもので忠吾が何所かで船を借りやうと存じますが相憎
 何所へ往つても船が一艘もありません、皆んな御断はりでげす宇治橋の傍に
 一艘あるから 忠「船頭〜 客人は主人だが何うだ 船頭「ヤ〜何うも御
 断はり申します 忠「然んな事を云はんで備前の岡山から態々来たんだ

馬場「虚言を吐け備前の岡山からわざ〜 螢を見物に来る奴があるものが
 …… 忠「だつて先生は備前の岡山じゃア無いか 馬場「ヨイ〜 船頭此
 所に船が一艘あるじやア無へか 船「あります船はあつても船頭が居りませ
 んや私「は外の御客様の所に御約束があります 忠「船頭は此方で勤める
 から一ペイ貸して呉れ 船「夫れじやア貸て進げませう 忠「如何程だ 船「
 三貫で貸して進げませう是れも傍に約定がしてあるんでございませうから其
 方を断はるんでございませうから五百も増してお呉んなせへ 忠「ヨシヨシ
 船頭「其代り薄べりも付いて御燭を付ける火鉢もあります 忠「イヤ夫りや
 ア何うも心配辱け無へ夫れじやア錢を拂うから」熊澤先生が 了「和郎
 何にかい船の漕ぎやうを知つて居るか 忠「イ、エ知りません 了「船の
 漕やうを知らなくつちやあ不可ん 忠「ナ〜ニ流れた所が宇治川だけの事に

ございます間違つて落ちた所が那の通り大勢人が出て居りますから誰か助けて呉れませう 了『劍呑千萬だナア人を頼みに船へ乗るなんぞは………チ
イ／＼船がグル／＼廻るじやア無いか 忠『夫りやアモ一是非廻ります廻る
船には逆らはずと申しますから……… 了『冗談云つちやア不可ない 忠
大變賑かだア、一藝者が乗つて來やアがつた』イケ騒々しく詩を吟じなが
ら來る者もあるジヤンジヤカ／＼三味線を弾て來る者もある熊澤は 了『ア
愉快／＼』と云つてお酒を飲んで居る然るに此方の柳の陰の所に障子が
立つてある船が一杯ある其内で上品に琴を調べて居る、熊澤先生耳を引
立つて居たが 了『ア一美音だ見んでは分らんが先づ十六七に成らうと云ふ
婦人だな 忠『へエ』植村馬場之丞が 馬場先生婦人てへのが分ります
か 了『分るとも 馬場』年まで分りますか 了『先づ音聲に籠のある所は

十六七の女だらう盲人では無い盲目と云ふものは陰聲だ 馬『好い女が悪い
女か分りますか 了』夫りやア分らない』回顧つて見ると足守忠吾が大安
座ア搔いて酒をグビ／＼と飲んで居る 馬『チイ／＼一人で飲んじまつ
ちやア困るじやア無へか 忠』螢なんかアピカ／＼尻斗り光つて詰られへ酒
が一番だ 馬』先生の分を飲んじやア不可んヨ………忠吾那の通り琴を調べ
て居る貴様に分るか女だか男だか……… 忠』先づ乃公の所では十六七に成
る女だ、盲人では無い、盲人の聲は陰聲で不可んものだ 馬』先生の真似を
して居る 了』然んなことを云つて植村那の琴は何んと云ふ曲だか知つて
か 馬』夫りやア知つて居ますともコロリンシヤンてんで 了』白痴ア云へ
那れは菊のしなりと云ふ實に琴と申し音聲と申し感心なものだ』と耳を引立
つて聞いて居る。

○第七席

宇治の螢狩に深雪に逢ふ
朝顔の歌を作りて別る

抑も此船に居るのは誰れだと云ふと筑前福岡六十二萬石黒田衣紋之助忠行の家來當時浪人京都より少し在方に這入つて岡崎村と云ふ所に住居をして居る矢部頼貞と云ふ元は三千五百石衣紋之助の御亂行に就て御意見をいたして御暇に相成つた聽て古主へ歸參を爲る時節もあるだらうと云つて奉公を爲ないて此所に居る今晩は御令圍及び當年十七に相成る娘の深雪別に十四五人の大一座、暫し唱ふて居りましたが障子を明けて琴を仕舞ひ舞陶しいから風を入れやうと云ふので障子を明ける熊澤先生が「了障子が明たからサア那方へ行け」と云ふのを一抔機嫌の二人が「忠那方へ行けつて中の別嬪を見て行きませう」「了コレコレ然んな事を云ふものじアござ

いません 忠「マアサ何も障子が明たからつたつて態々行くには及びません(中を覗き)ヤ一女揃ひだ、成程琴を懸いて居た女は十六七の別嬪でゲス一、ア、一奸い女だ小野の小町か楊貴妃か顔世御前か袈裟御前、朝御飯か晩御飯……」馬場奴なかをしげく見て居りましたが 馬「商人風の内儀さんも居るし 侍 風の内儀さんも居る、ハ、ア一家じやア無いな一家に斯んな妙な風の人が大勢居る氣支ひ無い、大方近所を誘ひ合つて來たのだらう、夫共親類かな」と首傾けて詰らない心配をして居ながらカピリくと酒を飲んで居る忠吾が又中を覗いて見て 忠「ア、一口取物を旨そうに喰つて居る、ア、蒲鉾を半分落した」了海は「了船を那方へ遣れ」云つて居る内に船椽へ出て來た女が五六人、中に娘の深雪琴を調べて勞れもしたか船椽の屋根に摺まり立つて居ると折しもプーツと吹いて來た風で

パツと被つて居た帽子が飛びました、帽子と云つたつて當今のハットじやア無い、女達は一回「アレ〜お嬢さん那の帽子が帽子が」と云ふ此時熊澤はパツと飛來つたる帽子を小手で受留めて手で押へました馬場之丞忠吾は是れを見て 忠「こりやア何うも先生豪い大變な事を爲ました外の女と違つて那の別嬪の帽子を取るなんてへのは大した事でアー仰ぎ願はくば拙者が受止めたかつたなア植村 馬「然ふとも〜先生に取られるなんてへのは情け無い豪い事を爲ました能く取つたく〜」了「何んだ猫が鼠を取りやア爲まいし……然し寝めてる所では無い那の船へ御返し申す 忠「返さんでも好いじやアございませんか 了「イヤ〜決て然ふで無い……然らば拙者が自ら返す」と扇をサツと開いて其上に載せ船様の所へ出て來て了「唯今風の爲に此帽子が飛んで参りました幸ひ私が受留めました」手

を掛けずに扇をズイと差出だす、受取りに出て來たのは矢部靱負の家内 家内「コレは〜誠に有難ふ存じます外の物とは違ひまして頭の物にございませすれば水中へでも落ちますと心悪くいたします誠に有難ふ存じます切望上がりまする物もござりませんが此方へお出でを願ひます 了「イヤ思召しは辱け無うございませるが男斗り三人に男女七歳の教えもござれば御免を蒙りまする 家内「然ふおつしわらんで切望お出でを願ひたう存しまする」植村は傍から了海の袖を引き 馬「先生〜折角ア、云ふもんでございますから行くじやアございませんか入つしやい」ポーンと一番先へ飛込んで仕舞つた續いて忠吾も 忠「先生お先へ御免下さい」と又飛込んで仕舞つて 忠「サア〜先生此方へ入つしやいまし」と云はれて了海先生も今は詮方が無いから 了「左様なれば」と船をもやつて向ふの船……へ正面

に居たのが深雪、下俯向て居る何所とも無く品格の宜しい娘で野尻先生も見惚れて居る位ぬだ色情と云ふ譯では無いけれども深雪も熊澤の様子を見て時ならぬ顔に紅葉を散らしてホツと一息吐て居る、深雪の心中は何んなものであつたか皆さん察して見玉ひ、時に了海先生 了「イヤ拙者扇子を那方の船へ忘れて参りました、鳥渡夫れを拜借いたしたく 家内「サ、蒸暑うございませうからお使ひ遊ばして誠に粗末でございませう、開いて見ると婦人の手跡で

梅ヶ香の麝るかすみのたへまより

こぼれて匂ふ鶯の聲

歌と云ひ筆法と云ひ實に大したものであるから霎時茫然と見惚れて居りましたが 了「鳥渡御尋ね申しますが是れは誰方の御筆でございませう 女中

ハイ夫れは那れにお出での奥様が御慰みに遊ばしたのを私が戴きましたのでございませう」深雪の母が 母「是れはしたりマア其様なものを御覧に入れて誠に赤面をいたします 了「イヤ御手跡と申し御歌と申し實に驚き入りました何うも結構。馬場之丞忠吾の二人は茫然して居たが 馬「忠吾く 忠「何んだ 馬「大分先生の方は話しが持てるぜ第一番に帽子で吾々は遣り損なつて仕舞つた今又歌で吾れくには更に分られへ何うも残念だなア斯ふ女の手へ来て吾れくのやうに持てなくつちやア詮方が無へ何か勝つ工夫はあるまいか忠吾が 忠「白痴ア云へ是れから女と吾々と相撲を取れば負けやア爲れへ 馬「船で相撲を取る奴があるものか、馬場之丞が 馬「御女中衆に申し上げます此所にお出での吾々の教師でございませうなかくの筆でございませうから何か書きますものがあるなら…… 了「コレく白痴な

事を云へ 馬「マア先生好うございます。能ある鹿は爪を隠し身のある豚は臍を隠すつてへますが然んなに何も隠すには當りません何かお出しなさいまし書くものなら何んでも好うございます。芋屋の看板でも蕎麦屋の行でも……」

了「和郎達は酔つて居るから困る」と云ふ時に女が一人 女「走れを切望願ひたうございますと忠吾の前に差出す 忠「委細承知拙者が……」

女「貴郎じやアございませぬ、先生に何卒願ひたうございます 忠「オヤ」

先生 貴郎の方へ口が掛りました何か御書きなすつて下さいませ 了「餘計な事を云ふもんじやア無い 忠「是非書て下さい 外聞が悪いから……」

了「海不承」に開いて見るに一輪 朝顔が書てある中々能く書いてあります、斯んな立派な品へ唯の歌を書くのも面白く無いと不意と胸に浮んだから野尻が 了「結構な御扇子恐れ入りますが汚します 女「恐れ入りまする」

が御認めを願ひたう存じます其所で筆取上げて其扇子へスラ〜と走り書きに書たには

「のひぬ間の朝顔に照らす日陰の情れなくもあはれ一ト村雨のハラ〜と降れかし

是れば其馬樂と云ふので 了「誠に不出来でございます、折角の御扇子を汚しまして恐れ入りました」と腰元の前に差出だす、深雪夫れを一と目見て阿母さんの前へ差出だしました、母は見て 母「ア、實に才の廻つたもの普通通の歌をよむかと思へばさいばらをお認めなすつた手跡と云ひさいばらと云ひ面白い 了「誠に御馳走に成りまして有難う存じます 男「斗り三人で御女中のなかへ恐れ入りますから御暇いたします 母「ア、貴郎宜しいじやアございませんか」イエ又御目に挂りますと劍術の出来る人だに由つて野尻は

元の船へホーンと飛込む、跡から忠告續いてホーン……植村が飛込まうと爲ると女中が其袖を押へて、女「アラ少々御待ちなすつて下さいまし、馬御用でござる、女「御姓名を承はりたう存じます、馬「私は植村馬場の丞と申します、女「貴郎の御名前じやアございません、馬「アレかそれは拙者の兄弟弟子で足守忠吾と申します、女「イエ那のお方では無いんで貴郎の先生のお名前を承はりたう存じます、馬「ハア然うですか、京都下川原に學校を開いて居ります野尻阿蘇次郎様と申します、女「左様でございませるか」と云ふ内にハヤ馬場之丞もホーンと飛下りる途端に船は那方へ消去りました、女「深雪は名残り惜氣に船のへさきに立出で、野尻の方を打眺める、了海も何と無く名残り惜しくや思ひけん思わす回顧る途端にハツと見交す顔、抑も男女の心中何物がある他の人は是れを知らず看客も聊か御心配の件

り是れが朝顔日記の發端に相成りますが次回のお楽しみ……

○第八席

伉儷全からんとして容易に結ばず
波瀾漸く起る人情の海

却説も野尻阿蘇次郎は其夜は宇治へ留まり翌日下川原へ立歸つて来たが人に語るやうな人では無し相變らず弟子を教えて居るお話し變つて前回に述べたる彼の矢部靱負先生は切望深雪に好い聲を聴いと思つて諸方の人に頼み出入りの人に頼んで居る所が何うも帯にや短かし襷にや長し恰好好い口が無い然るに或る一日の事東福寺の月信加茂助兼と云ふ人が参りました是れは古池や仲間が色々歌の話から四方山の話しの末矢部先生が靱負御兩君に兼々お頼み申して置いたが深雪も當年モ一十七歳にも成る切望好い聲をと思つて何分心當りが無い少しも早く御兩君御心配を願ひたいものだ

此時東福寺の月信が 月兼てのお頼み故諸方尋ねて見ましたが何分被仰る通りの人間がござらん……助兼氏何か御心當りがあるか 助左様
 其事に就てお話しがある……と云ふのは下川原に學校を開いて居る野尻阿蘇次郎と云ふ人年こそ行かんがなかくの人物でございます」傍から月信が
 月「イヤ拙者も夫れに就て思ひ出した第一品行正しい人で學問はあるし劍術も出来る」と云ふ美男では有りまするし 申分はあるまい」助兼が 助實に深雪どの、御心にも叶わうかと存じます先づ當時那の人を除いては外にはありませんまい」矢部が大層悦んで 鞆唯今お話し其野尻と云ふ人は拙者一面識も無いが何う云ふ人物でございます 月去れば元備前家の家來で當時浪人、教える所と申し説く所と云ひ一點の非の打ち所もありません年は漸う廿二三才美男で虚にも是れと云ふ失策の話しを聞いた事の無い人

でゲス 鞆「何うでげせう月信和尚、歌の會でも催して其野尻先生を此方へ招く譯には行くまいか 月「夫りやア那の先生の事故歌道も餘程心得て居られる様子故己れの好きな道で招きました事なれば早速參るでございませう 鞆「夫れじやア切望一ツ歌の會を催しますから御苦勞でも其人をお連れ申して下さい 二人「畏まりました」と云ふ時に今日は……と云つて次の間へ來た者があるから何者ならんと斯ふ思ひまして見ると立花貞庵と云ふ太鼓醫者 貞誠に御無沙汰をいたしました 鞆「誰かと思つたらば貞庵久しく見へなかつたなア 貞「イエ何うも誠に忙がしかつたもんですから遂々何うも知りつゝ御無沙汰をいたしました」と扇で頭をポカくと叩いて居るのは何んの爲か傍から月信が口を出して 月「貞庵さん何時も忙がしい」と云つてるが移轉の手傳ひでも爲るのかい 貞「此りやア何う

も恐れ入りました移轉の手傳ひ杯を醫者が爲ると云ふ事はございませぬ病家
 が段々殖えまして……月『へエー京都も廣いもんだ和郎のやうな者に掛
 る病人があるかい 貞』御冗談おつしやつちやア不可ませぬ掛る所じ
 やアございませぬ、唯今私の病家は三四十軒からございます 月『ウム
 夫りやア何うも珍らしい貞庵和郎の事を近所で雀醫者々と云ふ事を云
 つてるが和郎知つて居るかい 貞』へエー雀醫者てへのは何う云ふ譯で
 さいます 月『雀醫者と云ふのは藪に成らんのか竹の子醫者と云ふ未だ竹の
 子に成らないのが雀醫者と云つて是れから藪へ近寄るだらうと云ふ 貞』
 御冗談おつしやつちやア不可ませぬ夫んな醫者があるもんですか唯今下
 河原の野尻と云ふお話しが出ましたが夫りやア何んで…… 靱負』ナニ和
 郎の知つた事じやア無い外の事だ 貞』イエ外の事ではありませぬ那の野尻

と云ふ者は私の元同國の者で去ぬる三月清水に参詣した時に出逢ひまし
 て御錢が一文も無いで紅屋に泊つて居りまして氣の毒に存じたから私がお世
 話を爲やうと引取つて私共の家でもつて指南をして居た所がだんくお
 弟子が殖て来て手狭でダスから下河原へ學校を新築いたしました那の人の身
 体に就ては私が萬事取仕切つて居ります 靱負』ハア夫か夫人なら君が萬
 更知らん事でも無い妻でもあるか 貞』妻はございませぬ早く妻を迎へると
 修業の邪冤に成つて不可ん、女房は好まんと云つて居りますモ一娘のこも
 持參金を持つて行く地面地屋敷を持つて行くと云ふのが如何程もありますけ
 れさも皆片ツ端から断はつて仕舞ひます何んだつて劍術は出来る詩は作る歌
 は讀める學問はあるし何一ツ不足の無い方でございます 靱負』夫れじやア
 幸ひだ貞庵此矢部の宅でもつて十五日に月見の宴會を催うかと思うか

ら申して進げたらば先生お出で下さらうか 貞夫りやア来ませう好きの道
 でゲスに由つてお出でに成りませう 靱負夫ふか何爲る好い手置があつた
 じやア和郎から一ッお出で下さるやうにお頼申して呉れないか 貞へエ夫
 れでは鳥渡往つて来るか来ないか取極めて返事を爲ませう 靱負千萬辱
 け無い、首尾克く先生がお出でに成れば褒美を進上爲る 貞夫りやア何
 うも有難い、鳥渡一ト走り往つて来ませうと矢部の屋敷を飛出だして暫く
 経過と息をせつせと歸つて来て 貞申上げます野尻先生に申上げました所
 が至極御悦びて委細承知いたしました是非とも参るに由つて皆々様へ宜しく
 申上げて呉れヨとの事でございます 靱負夫れは有難い」と厚く貞庵に
 禮をして返しました扱で此所で十五日に来て阿蘇次郎が聲に成るとか深雪が
 嫁に行くのが爲れば此お話しが是れつ切りで済むのでゲスが講釋屋の米櫃

……一ツの物語りが出来たと云ふのは彌々當日十五Fと相成ると晝過ぎ
 からそろ／＼客が来る矢部の家内の面々一同悦んで料理萬端仕度をし
 て女中共に至る迄外日螢狩りで見たい男がお出でなさるのであると
 勇んで居る、中にも娘の深雪は月信の話しと云ひ、助兼の話しと云ひ貞庵の
 話しの様子を聞いて扱ては野尻先生がお出でになる事かと思ひに焦れて居る
 人なれば何時よりは一層花やかに仕度をして待つて居る、彌々日が暮れる、
 加茂助兼先生文臺を作り追々御客も来る其夜の月と云つたらば一點の曇
 も無い、實に能く冴渡つて居るサア貞庵も来ないが野尻先生も来ない何うし
 たらう外の客人は来ても来なくつても何うでも好い矢部先生も心配をして
 居る、娘深雪も口へこそ出して云ひませんが其落膽失望心配は大方なら
 ない 深雪奈是入つしやらないのであらう 靱負貞庵の来ないのは可笑

しい、然し那奴の事だから何をチャラツポコを云つたか分らない何うしたの
 であらうか』と色々心配をして居る所へ貞庵汗を流してやつて来て
 貞『へー誠に何うも旦那様恐れ入つた事が出来ました 執負『何んだ 貞』
 野尻先生の事でございませすが御同道いたそうと私が下河原へ参りますと昨晩
 から寒熱往來して烏渡傷寒のやうで私が診察いたしました所がなか
 の重体早く申せば七轉八倒の苦しみ折角御約束いたしたたが此通りであるに
 由つて上がる事が出来ない誠に 申譯けは無いが和郎から宜しく申上げて
 呉れるやうにと斯ふ云ふ事でございまして誠に何うも御氣の毒で愚老が何ん
 だか虚言を吐いたやうで恐れ入りますが何爲る詮方がございません全快を
 いたせば必ずお詫に上がると云ふ事でございませから不悪らす御勘辨を願ひ
 たう存じまする』と聞いて執負大きに落膽をして 執負『ア、然ふか』と云

つたが中に深雪の心の内は何んなであつたらう女達も落膽して 女『夫れ
 じゃア何も外のお客を招ぶには及ばなかつたものを皆んな歸して仕舞ひませ
 う』と中に人の悪い女中杯は壺所へ等に頼被りを爲して立てたり雪駄の
 裏へ灸を据へたりして居る人情と云ふものは皆んな斯ふしたもので据へら
 れた客こそ災難で御座います時に貞庵が懷中から一枚の短冊を紫縮
 緬の帛へ包んだ儘出だしまして 貞『時に皆さんに御目に掛けます野尻先
 生苦しい中に是れを御認めなさいまして誠に不出来ではあるが旦那にお見せ
 申して呉れるやうに七轉八倒の苦しみの中で御書きなすつたもの 執負『夫
 りやく何うも御風流な事で御病中御認めなすつたとは感心な事だドレド
 レ野尻先生の玉吟拜見しやうと帛を解て手に取上げて見れば
 山の端に今宵ばかりは憎みあり

入るかたおしき望月の影

靱負「何うも實に感心だ御病中斯く御認めなされる位ぬだに由つて平生の御腕前實に思ひやられるイヤ貞庵和郎が何もチャラツポコを云つた譯じやア無い是れを届けて呉れたのは辱け無い切望御全快に成つたらば御出で下さるやうに是れで大きに私も氣が濟みました」此歌を見た加茂助兼先生も大きに感服いたして今宵の第一番の句に据へる事に成つた歌と申し手跡と申し實に美事なもの扱て其夜は一同引けまして貞庵も貰ひ物をして立歸つたが翌日矢部の方へ来て 貞「昨日は御馳走に成りまして有難ふ存じます 靱負「昨晚は大きに大儀であつた野尻先生の御病氣は何うじや 貞「鳥渡今日御様子をおひますと昨晚の九ツ頃ほいから開きが付いて十のものは八九は御全快併し今日明日といふ譯には参りません全快次第御禮に上がるから

宜しく申上げて呉れるといふ事でございます 靱負「イヤ夫りやア何うも千萬辱けない加茂先生始め皆一同實に昨日の歌には感心をいたした野尻先生の御全快を御待ち申して居る夫れに就て加茂先生が御撰みなすつて野尻先生か第一番のお勝ち此所に景物もある巻と一緒に御病中の御慰みに御覽に入れて呉れるやうに 貞「ヘエ夫りや定めし御病中御悦びでございますう委細承知しました、早速お届け申します靱負「娘の深雪を呼んで 靱負「深雪其所に其儘包んである景物床の間に巻があるから包んでやるやうに 深雪「ハイ」と深雪は其二品を持って己れの居間へ往つて四方を見廻すと誰も見居る者が無いから造化精妙と墨摺流して短冊にサラ〜と認めた

なが 流れては末のうきみをいかにせん

面影へだつ宇治の川霧

斯く認めて是れを彼の巻の間へ入れて、帛に包んで此方へ持つて来て深雪
 アノ貞庵さん大きに御苦勞……是れを切望那の先生に御届け申して呉れる
 やうに、貞「畏まりましたございます、嘸御悦びでございませう、好いお慰み
 で早速御届け申します」と又御馳走に成つて貞庵は歸りまして直ぐに下河原
 の野尻の所へ来る、お弟子さんが此方に一同書見をして居る所へ、貞「へ
 エ今晚は……」と這入つて来る植村馬場之丞が、馬「何んだ日も暮れない
 内に今晚はだなんて、貞「エ、間違ひました今日では……誠に御無沙汰し
 ました、馬「何を云つてるんだい今朝来たじやア無いか、貞「然ふ、皆ん
 な違つちまつた又御免下さいまし」と奥へ来て、貞「へエ申上げます唯今岡
 崎村へ参りました何うも貴郎様の歌を感心いたしましたまして四十一人斗り集つ

て居りました、貴郎の一番に秀句だそうでございます、了「チー、夫れば
 夫りやア何うも思ひも寄らん事で、貞「是れが巻で御慰みに御病中御
 覽下さいまし御景物は貞庵和郎にやるからと斯ふ被仰いますから是れは私
 が頂戴いたして置きます、了「嘘を付け貞庵乃公が秀句で景物を貰つたの
 に其方が夫れを貰う譯は無じやア無いか私が第一なら私の景物だ、貞「
 けれども主郎が持つて御出でなすつた所が詮方がございません私が頂戴い
 たします、了「然うかマア好い、貞「皆さんが貴郎が御病氣で残念だ、と
 被仰つてお出で、御全快次第早速切望お出でを願いますと云ふ事でござい
 ます、了「好しく、病中甚だ拙ない作を出して誠に景物とは思ひも寄ら
 んことであるドレ、拜見を爲よう、貞庵は此方へ来て弟子と饒舌つて居る
 開く時に何か、間からパタリと落ちたから不思議に思つて見ると短冊に何

か書てある讀んで見ると

流れては末のうきみをいかにせん

面影へだつ宇治の川きり

了「ハア是れだか外日 螢狩りに逢つた深雪と云ふ彼の娘ア、一手も好い戀歌に違ひ無い人知れず此間へ入れて遣したものと見へる」机の抽斗へポーンと入れて仕舞つて誰に見せやうでも無い貞庵は御馳走に成つて 貞誠にいろくちやうだいの色々頂戴物をいたして有難ふ存じまする切望御大切に遊ばしまし是非御待ち申すと云ふ事でございますから御全快次第……………」了「ア、一好し」
貞御暇にいたします」と云つて下河原を出て心中に悦んで貞庵が 貞先づ病氣が直つて矢部の所へ連れて行く娘の聲に爲やうとか何んとか成つて乃公が橋渡しを爲る、矢部の方は工面は好し相當の禮を呉れる

であらう野尻先生だつて唯てへ事は無へや先づ三十兩や五十兩の金子には成るな福德の三年目有難い事である」と四條の橋へスタく掛つて来る、空頼み、ち外れる一件は次回に……………」

第九席

貞庵 勇仙に逢つて苦み
勇仙阿蘇次郎と偽つて恥を搔く

北思笑みながらやつて来る後の方から 男「チーイ其所へ行くのは貞庵じゃア無いか 貞「ハイ誰方でございます」と回顧つて見るとビックリ驚いたのは前回申述べましたる備前岡山萩野勇庵の倅 勇仙で此人をだまらかして遊びに連つて往つて家を出る時に印籠だ脇差だ金子だと云ふ物を盗んで逃げて来たんだ萬一逢つた時は斯ふく言譯を爲やうと考へて居たには居ましたれど不意の事だに由つて驚いてトチツて仕舞ひ 貞「此りやアく誠

に何うも……誠に何うも……』と云つて下斗り向て居る 勇『然んなに
 下斗り向て居ないで話しを爲たら好いだらう顔を上げなさい 真『へエー誠
 に若先生誠に相済みません……實に面目次第もございませぬ別けて先
 般の事は貴郎様が寛仁大度でいらつしやるからモ御忘れになつたらうと
 思ひますが…… 勇『待て〜能い氣の男で誰が忘れる奴があるものか
 真『過ぎたるを咎めずとか申しまして然んな大した御立腹はあるまいと存じ
 ます大抵の者なら縛るとか私を其筋へ引出すとかなさるんでございませぬ
 若先生の事であらつしやるから夫れが貞庵の身に取りまして誠に何うも仕
 合せでございませぬ…… 勇『然う饒舌るなヨ未だ水へ流すとも勘辨を爲る
 とも云やア爲ないじやア無いかマア頭ア揚げなさい人が立つから頭ア上げな
 真『何うも人が立たうが月日が立たうが貴郎の事を忘れる暇はございませぬ

若先生をおだまし申して未だ那の一件もありませんし則ち……其……
 所謂……就中…… 勇『何を云つてゐるんだ斯んな所で話しを爲ても人
 が立つて見共無何所か料理屋へ往つて一杯飲まう今無い物を乃公が呉れ
 と云ふ譯じやア無いからマア一ト口飲まう 真『へエ有難う存じますじやア
 何所かへお供をいたしませう』と大變に謝罪るもんだから何うにも斯うにも
 仕方が無い扱て一軒の料理屋の二階へ上つてもと〜顧問醫者だから 真『
 時に若先生京都見物にでも入つしやいましたか何うでゲス私が御案内
 いたしませうか…… 勇『イヤモウ和郎の案内は懲々したからモ一眞ツ平
 だ 真『時に若先生何所に入つしやるんでございませぬ 勇『三條小橋の錢
 屋と云ふ旅泊屋に泊つて居る 真『ハア左様でございませぬか 勇『今何家業
 を爲て居るんだい 真『へエこれとても大先生の庇陰でげして、今では四

傍わらわに家うちを持ちまして醫者いしやを家業かげふにいたして居ります 勇いしや醫者いしやが出来できる
 かい 貞ななかく出来できやア爲なませんやれ京都きやうとへ来てから何人なんにん人を殺ころしたか
 分わかりやア爲なませんけれどもマア匙さじと云いふ奴やつを持つて居ゐる爲ために御咎おとがめも受うけま
 せんが…………… 勇いしや然さうだろう夫それでも直なつた病人びやうにんがあるかい 貞いしや夫そり
 ヤアマア十人にんに一人にん位ぐら無ない事ことはございませぬ 勇いしや險けん呑のんな醫者いしやだなア
 貞いしや其故そのゆゑ一せつ拙者せつしやはうつかり薬くすりは盛もりませぬ脈みやくを取とつてもなかくわかり
 ませんから大おほきな聲こゑじやア云いはれませぬが當あたり障さはりのないやうに何なんの病氣びやうき
 でも葛根湯かつこんたうを盛もると極きめました何病氣なにびやうきだつてまづ葛根湯かつこんたうを盛もつて置おけ
 ば當あたり障さはりが無なく其内そのうちには死しぬ者ものは死しぬ直なる者ものは直なりますから然さふ云いふ事ことに
 極きめましたうつかり熱ねつの病やまひにもつて往いつて下劑くだざいし杯などを掛かけちまつた日ひにや
 ア夫それこそ大變たいへんでございませぬからなア其代そのかはりり若先生わかせんせいの前まへでございませぬが病びやう

人に葛根湯かつこんたうを飲のまして一し生懸命水しやうけんめいみづを浴あびて神信心かみしんじんをいたします
 勇いしやなげ…………… 貞いしや極きく先さきの人ひとに内々ひとないで水みづを浴あびて病人びやうにん全快ぜんくわいくをと
 祈いのつて病人びやうにんが殖ふるだけ餘計水よけいみづを浴あびます 勇いしや大變たいへんな醫者いしやだなア何どうも妙めう
 なもんだ唯今ただいまの處ところで病人びやうにんはどのくらいある 貞いしや左様さやうでございませぬ先まづ
 五六十軒けんもありませうかなア 勇いしや然さふか如何程いくらか工面くめんが直なつたらば貞庵冥ていあんめい
 利りだに由よつて少すこしづいでも返かへしたら好いいだらう 貞いしやへエ實じつに那あの時ときには面めん
 目次第はくしだいも…………… 勇いしやイヤ和郎おまへの爲ためには随分ずいぶん酷めい目めに逢あつたぜ衣きもの物ものから印いん
 籠らうから金子かねから…………… 貞いしやイヤ又また夫それがで出でちやア困こまりますヨ夫そりやアモ
 前ぜん申まをしあしる通とほり忘わすれる日ひはございませぬから幾分いくぶんか算段さんだん爲なる心こゝろ得えなんで
 夫それに就ついて私わたくしの目めの先さきに金子かねがア下さがつて居ゐります 勇いしや何所どこにア下さが
 つて居ゐる 貞いしや然さんな目め付めきをしたつて見みえやア爲なませぬ夫それが首尾しゆび克よくく行ゆ

けば貴郎の所へ二十兩や三十兩の金子を持つてお詫に行くことができるので
 …… 勇「ハテネ、そりやア剛氣だ何んだい其金子儲けと云ふのは……
 貞「へエ然れですか遂に滑つてペラ〜饒舌つて仕舞ひましたが貴郎も御
 存じてございませう那のお國に居りました熊澤了海と云ふ男を御存じて
 せう 勇「ウムぬの熊澤了庵の聾に成つた次郎左衛門かい知つてる〜夫
 れが何うした 貞「夫れが貴郎何うも江戸國の改革を爲まして功成り名遂げ
 て身退くは臣の道なりと一たん國を立退きまして此三月清水の觀音堂で
 出逢つて早く云へば私の所へ居候世間では居候置てあはす居て合はず
 なんと申しますが何爲ら當人が學者だもんですからだん〜と弟子が殖えま
 して唯今の所じやアそのなんです野尻阿蘇次郎と云つて熊澤で居ると國から
 迎ひが來ると面倒だからと云つて改名をして下河原に學校を立てました然る

に學問が出来る所へもつて來て男が好いと來て居るから昨晚の事でございま
 す岡崎村と云ふ所に矢部靱負と云ふ黒田の浪人者がありました元は三千
 五百石其所にお嬢さんがあつて深雪と云ふ夫れがマア惚れたんでげせう其親
 父は大層に阿蘇次郎に惚れて昨夜岡崎村へ月見の宴がある其所へ招かれ
 ましたが折節し御病氣が起つて行く事が出来ませんでしたから其病氣が
 癒つたらば私が先生を連れて行く然う爲ると今迄は知らない娘にしても屹
 度男が好いから惚れます惚れれば私に掛け橋をして呉れるとか云ふに違ひあ
 りません向ふが一人娘、此人が一人者、直ぐ夫婦に成るソレ御覽なさい私
 が兩方からしこたま禮が貰へる少くなくも五十兩位には成るだらうと
 存じますから其時に和郎さんの所へ三十兩位ぬの金子は持つてお詫に行く
 積りです』と問はず語りの貞庵のはなし腕拱いて始終の様子を聞いて居つ

たる彼の勇仙ハツタと斗りに膝を打ち 勇「サムー元は黒田の家來で三千五百石矢部鞆負の娘深雪……年は十六七じゃないか 貞「エ、十六七で實に別嬪………好い女でゲス 勇「夫りやア乃公は知つてるヨ 貞「エ、知つてますかい 勇「知つてるとも……四十里や五十里離れて居ても十六七から二十一二に成る女の身元は残らず知つてる 貞「夫りやア何うも恐れ入つたもので 勇「イヤ冗談は置いて其娘を知つて居ると云ふのは外じやア無いが少し用があつて此五六日前の事だ八坂の塔の傍まで行くと向ふから十六七に成らうと云ふ美しい女が供を連れて遣つて來た京都は女の名物だとは云ふけれども斯んなに美しくしいのがあるか知らんとだん／＼聞いて見ると矢部鞆負と云ふ浪人の娘だと聞いて襟元から水を掛けられるやうに思つて思ひこんだア、何ぞ男と生れたからには斯ふ云ふ女を女房にいたしたいと思つ

て夫れから宿へ歸つて來ると早く云へば物もロク／＼喚べられない 貞「へエー夫れから何う爲ました 勇「夫れからと云ふものは寢ても醒めても忘れる事が出來ない思ひ出すと胸が張裂けるやうだ斯ふ成つて見ると貞庵お前は乃公の命取りだ 貞「ッヨ……ッヨ……ッヨ……冗談云つちやア不可ません斯りやア何うも大變な話しに成りましたなア成程…… 勇「其所で貞庵其矢部と云ふ者は熊澤の顔を知つてるのか 貞「夫りやアナニ知りやア爲ません一面識もないから…… 勇「顔は知らんのか 貞「知りません 勇「成程そ夫れは幸ひだ何うだ貞庵乃公を其野尻阿蘇次郎だと云つて岡崎村へ連れて行け首尾克く行けば二十や三十の禮はして其上以前の貸しを棒をひいてやる 貞「へエー夫りやア何うも有難う存じます……如何程下さいます 勇「然ふさ三十兩やらう 貞「三十兩下すつて以前のお借りが棒曳き……實に

有難うございませうが夫りやアすこし不可ませんなア 勇何が少しいかん、
 野尻先生は病氣だと云ふから少しは三間が取れるだらう乃公を連れて行き
 貞「けれども不可ませんれ 勇「なぜ不可ない 貞「少しいけません 勇
 奈是不可ない 貞「無駄でござア 勇「何が無駄だ 貞「何が無駄だつて貴
 郎野尻先生は文武 兩道に秀で居ます 勇「文武 兩道は外面から知れや
 ア爲れへ 貞「夫りやア知れやア爲ませんけれども文武の 兩道が出来て美
 男でダス貴郎は失禮ながら美男とは云へません 勇「奈是サ 貞「奈是だつ
 て貴郎の顔は誰が見たつて何うも狸の天麩羅見たいだ 勇「ナニ……………
 貞「イエナニ此方の事でございませうが何うも不可ませぬ 勇「不可んか
 出来なげりやア出来ないで宜しい唯今其方が醫者に成つて世渡りをして居る
 のは是れも皆んな岡山の阿父さんの御陰じやア無いか其恩澤を忘却して

仕舞つて那んな不始末を働いて……………夫れも好い夫れを棒を引て外に褒美と
 して三十両やらうと云ふに出来んと云ふなら宜しい此方に了見がある 貞
 了見とは何うなさる 勇「何う爲るとは知れた事僅た今印籠脇差を返せ金
 子は貸すに爲た所が印籠脇差は何所へか無くなして仕舞つたのだから今返
 す譯には行くまい 貞「夫りやア何うも御無理だ 勇「ナニが無理だ貸した
 ものを催促するのは當然だ貴様は持逃げを爲たんだから町奉行へ訴へる
 から然う思へ 貞「何うも大變な事に成つて仕舞ひましたなア何うも……………
 じやアお連れ申します 勇「連れて行くかい 貞「連れて参りますお連れ申
 しますが不可ませぬ 勇「何が不可ん 貞「先方は野尻阿蘇次郎と云つて野
 郎頭貴郎は惣髮でございませう醫者の忤だから當前ですが惣髮の野尻でへ
 のは無い其頭じやア御紹介爲ることが出来ませぬ矢部先生の方で持つて

信用しまい 勇「道理千萬だ然んなら野郎頭に成る野郎髪を惣髪に爲ることは出来ないがナニ惣髪が野郎頭に成るのは譯は無い 真「然うですか マア今日は御歸んなすつてとつくり御考へなすつて明日拙者方へ入つしやるやうに……首尾克く行けば宜うございませうが遣り損なつた日にヤア大變でゲス 勇「好しく明日貴様の所へ行く明日に成つて不可ません杯と云ふと直ぐ町奉行へシヨビイて行くから然う思へ 真「畏まりましたじやアお別れ申ませう」其家の勘定は勇仙が拂つて兩人は別れて家へ歸つて来て 貞庵は 真「ナニ那是云つたやうなもんの思ひ諦めるであらう夫れとも那んな白痴野郎だに由つてやつて来るかも知れない何爲る心配な事が出来た』と云つて其日は寢て仕舞つたが翌日に成ると 真「お頼申しますく 真「ドレ……』と云つて玄關へ来て見ると黄八丈の着物、黒縮緬の羽織、

野郎頭に成つて一本差して匂袋でも入れて来たかブンく癖香の匂ひをさして居る 真「チヤく途々白痴野郎やつて来やアがつた……何うもスツバリ若旦那野郎頭に成りましたねへ 勇「ウム此通り野郎に成つた何うでも爲る乃公だつて野尻だつて別段變る所はあるまい、サア参るく……何んだ飯なんぞ喰つてる奴があるかい 真「デモ御腹が空きましたからチヨイと一杯搦込んで参ります…… 勇「早く爲るく旨く参れば澤山旨い料理を喰はしてやる早く仕度爲る』と云つて催促して居るから詮方がありません仕度をして直ぐに貞庵勇仙と一緒に出掛けましたが直ぐに奥へなんぞ通されへで乃公が奥へ往つて外の話しを爲て不在だとか何んとか云つて追歸そう夫れから又跡は跡で何んとか一番工夫を爲すばア成るまい何しろ飛んだ奴に邂逅して酷い目に逢つたと考へながらだんくやつて来ると運の悪い時は

詮方の無いもので向ふから供を連れて来たのは矢部靱負先生。靱負其所へ行くのは貞庵じやア無いか』折悪い所であつたと思つたが詮方が無い。貞『先日、誠に御馳走様で、靱負甚だ御急立て申すやうだが下河原の先生は未だ御全快無いが少々でも御全快ならくどいやうだが御連れ申して呉れるように。貞『委細承知いたしました誠恐れ入りますが未だ何分……』と下を向いて居る勇仙後に居て、勇『モ一全快爲たと云へ。貞』へエ。勇『早く爲る昔様が其一言で事が済むんだ。貞』アモ餘り違ひますから……。勇』エー早く云はんか。貞』へエ。靱負『貞庵何れ先だつてのお話しの様子では御全快になるであらう間違ひ無く岡崎村へお連れ申すやうに。貞』へエ……』と貞庵下斗り向て居る後から勇仙白痴野郎が、ついついたり抓つたり爲て見たが迎も貞庵が紹介せそうも無いから詮方が無

いと勇仙のかくと前へ進み出で、勇『是れば矢部靱負どのでございませしたか拙者は下河原に學校を開いて居ります野尻阿蘇次郎と申します者御見知り置かれて御別懇に願ひます』貞庵泣出しそうふな面ア爲やアがつて貞』サア大變だ遂々云出して仕舞やアがつた』と思つて居る靱負其人の様子を見て居たが顔の中央鼻のあるべき所に鼻が無い猫がのびを爲たやうな面ア爲て居る月信も助兼も貞庵も美しい男だくと云つて居たから斯んな凸助じやア爲いと思つて居る矢部先生は襦袢から頭の頂上まで見上げて居る内に勇仙『勇』是れで御面會いたします事は何よりの重疊、往來ではお話しも出来ません、時刻でございますから何れかで一盞差上げたう存じます切望お出でを願ひます貞庵は、貞』大變な事に成つた途々此りやア逃亡だ白痴程世の中に怖い者は無い』矢部先生は不品行な事は嫌ひなお方斯んな奴といやだ

と思つたが何う云う様子だが腕前を見てやらう酒の飲みやう口の利きやう話
 しを爲て居る内には人物が分る 鞆負「夫れでは御同道いたしませう」とあ
 る料理屋へ登つて解れ座敷へ通り 勇「時に矢部先生今日の所は拙者に
 お任せ下さるやうに 鞆負「左様か」ポン／＼手を叩いて女が 女「ハ、ハ、ハ
 勇「コレ／＼女中客人は三人だが出来る者は二人前宛で宜しい」矢部
 先生 鞆負「淺間爲い根生の奴があるものだ三人来たものを二人前詭へ
 ヤアがつて」又勇仙の了簡では貞庵は家で飯を喰つて来たから好いだらう
 と云ふ様子を見て居る所が尋常の人とは思はれない聽て酒肴が来て一盃
 始めたが酒の飲みやう肴の喰ひやう甚だ不作だ矢部が 鞆負「此りやア不可
 ん月信助兼の偽りと極つた然し醜面だからと云つて必ず歌俳諧の出
 来ないと推つたものでは無い」と思つて居る内に勇仙前に乗出だして 勇

矢部先生一盃献じます」と盃洗で雪がないでズイと盃を差出す機みに盃洗
 の中へ匂 袋を落した勇仙眞ッ赤く成つたが黒い顔だから赤く成つたのは
 分らないに成つた所は佐川流の上下のやうだ矢部は呆れ返つて 鞆負「
 チャ／＼／＼んな面をして匂ひ袋を持つて居やアがる」と見て居る内右の手を
 ズツと出して其奴を絞つて濡れた儘袂へ入れて直ぐ其手で田樂を取つて横
 喰を始めたスルと豆腐が柔らかいから膝の上へ田樂が落ちた夫れを拵んでズ
 イと立上つて椽俣の所へしやがんで何う爲るかと思つて居ると 勇「来い／＼
 』と狗を呼んで居る内尾をフリ／＼白狗が一疋来ましたから 勇「ワ
 ン……」と云へ 狗「ワン……」田樂を投げてやつて居る、彌々此りや
 ア白痴やらう堪らないから貞庵小便に立つて行く矢部先生思ひ付いたに由つ
 て一番學力を試してやらうと思つて 鞆負「拙者は詩作の事を一向に存じ

ません切望先生宜しく願ひます』と題を出した 勇へ『と云つたが流石の勇仙是れには驚いた醫者の息子でありますから詩ぐらゐ作れない事は無いが今が今と云つてはなか／＼出来ないから彌々泣ッ面を爲て居る聽て筆を取つてサラ／＼と書いたが書いたりやな西洋の横文字を見たいなものを書きました赤面をしてブル／＼震へなから矢部鞆負の前に差出だす矢部取上げて見るとイヤハヤ取るに足らん外日病中だと云つて書て遣した山の端に今宵ばかり……』と云ふ歌の書風とは鶴と鳥ほど違う 鞆負『彌々此奴偽物だワイ』と氣が付いたから 鞆負『一步御先きへ御暇をいただきます』と云ふ所へ貞庵小便所から出て来て 鞆負『貞庵又近日逢ひませう』と供を一人連れてブーイと歸つちまう 勇『貞庵出来たくは是れでモ一好い一遍知己に成つたに由つて明日にも逢う事が出来る話しがすつかり纏る一人じやア切り貞庵といふ人は出て来ません……』

○第十席

勇仙恥の上に恥を搔く
阿蘇次郎深雪不意の邂逅

不可んに由つて同道して呉れるやうに 貞『モ一斯ふ成つちやア彌々逃亡だ 勇』ナニ 貞『イエナニ此方の事で……』と家へ歸つて来て立花貞庵家財を道具屋に残らす賣拂つて金子にして何所へか逐電を爲て仕舞つた切り貞庵といふ人は出て来ません……』

扱て世の中に白痴程怖いものは無い翌日に成ると貞庵の所へ往つて連れて往つて貰はうと思ふと家がピツタリ仕舞つて居る隣家で聞いて見ると 甲『何んでございますか昨夜の内に道具屋が来まして何んか賣つたり買つたり爲て居りましたが何所へ往つちまひましたか何所へ行とも何んとも申しませんから分りませんが何う爲やアがつたか……』此一件に就て夜逃げを爲たとは知

りません 勇イ、ヤモ一昨日一遍逢つて居るんだから自分一人で往つたつて不都合はあるまい」とスタくやつて来た立派な屋敷で聴て古主へ歸參が叶うであらうと此所に閑居をして居る玄關へ掛つて 勇「お頼み申します取次『ドレ』と言つて出て来て見ると何んだか丹波猿を見たいな面をして居る 勇先生に御目通りがいたしたい拙者は下河原に學校を開いて居りまする野尻阿蘇次郎と申す者立花貞庵同道いたすべき所でございますが少々用がございまして拙者一人にて參上 仕りました昨日は甚だ失禮をいたしました宜しう切望御取次ぎを願ひます」奥へ其事を取次ぐと夫りや野尻の先生が御出でなすつたと云ふ譯で女達は悦んで居る矢部靱負が今日の話しを爲なかつたから深雪は那方の着物此方の帯を出してと騒いで居る暫らくあつて深雪が夫れとは無しに玄關次の間に來て様子を覗いて見ると驚い

た色の黒い所へ今日に限つて白粉をなすつて來たから黒石へ雪が積つたやうだ狸と思へば狸猿と思へば猿匂 袋を入れて居るからブンく匂つて堪らない 女達も呆れ返つて引込んで仕舞う取次が奥へ往つて 取「旦那野尻阿蘇次郎先生が參りました 靱負「色の黒いムツクリ爲た猿のやうな面をして居る奴か 取「御意にございます 靱負「然んなら用事は無い唯今客來であるに由つて以來お出では御無用と云つて返しちまへ」失禮な言分だと思つたか取次ぐ 取「今日は客來で御目に掛る事は相成りかねます以來當家にお出での義は御無用お断はり申す」と云つた勇仙驚いたれ野郎頭に成つて仕舞つたから國へ歸る事は出来ない貞庵を探したが一向譯が分らない却説お話しは變つて手違ひに成る時と云ふものは詮方の無いものにて熊澤了海先生の阿母さんと云ふのが未だ國表 肥後の熊本に存生して居ります

其母の許から病氣で切望其方に逢ひたいから来て呉れるやうにと云ふ書面其所で大きに驚きまして門人衆に留守の所を頼んで仕度を充分にいたして此所を出立を爲る途中にお話しもなく肥後の國漣田郡熊本へ来る阿父さんは御隠れに成つて阿母さんが老年に及んで煩つて居る所だから大層に悦んで氣のゆるみか十日斗り經過で病死いたして仕舞う、テ野尻先生七日の追善供養も済み四十九日の其間は靈魂屋の棟に止まると云ふ扱て京都へ歸らうと思ふ所が途々舊友杯に留められて翌年の八月迄此所に逗留して居りました其間別にお話しも無く一同に別れを告げて熊本を出立に及び肥前の博多に来て船に乗り段々沖中へ出て参りましたが此船中へ者は随分面白いもので船の中と花見の場所遊廓へ行く道の料理屋杯と云ふものは直きに懇意な人が出来るもので關東の人であれば北越地方の

人がある又は關西の人であれば四國もあると云ふやうな譯で始めの内は皆んな黙つて居るが然ふくは黙つて居られない退屈に成るから 甲「何うです皆なさん一河の流れ一樹の陰袖摺合うも多少の縁躑く石も縁の端とか云ひますが斯ふやつて諸國の方が一ツ船に乗合つて一ツ土瓶の湯を呑むてへのも深い御縁黙つて居た所が詮方があります御國のお噂でも被仰る方はございませんか」と云ふと一人が 乙「御道理のお言葉じやア一ツお話しでもして退屈を凌ぎませう……モシく其方に居睡りを爲てお出での方貴郎何方でございます 丙「私かな 乙「ハイ 丙「私は雲州松江の者で 乙「ハア出雲でゲスカ 丙「左様 乙「出雲は何が名物でゲスカ 丙「左様さ別に名物はございせまんが出雲の大社と云つてな日本第一の社で…… 乙「成程……然んな事を云ひますが何んでゲスカへ大社と云つて色の取持を

爲る神様でございませうか
 取「飛んでも無い事を云つて乗の平内じやアございませうか
 乙「だつて能く
 浄瑠璃や何にかの中に雲の神の御紹介……と云ふ事があるじやアございませうか
 丙「夫りやア違ひませう
 甲「へえ、じやア何が祀つてあるんで……
 丙「素盞野雄の尊が祀つてあります
 甲「ハア然ふですか素盞野雄尊と云ふとお神樂でやる剣を持つて身体の大きな髯を生した妙な着物を着た方ですれ成程じやア色の取持ちを爲る神様じやア無へな外に名物がありませんか
 丙「外には蜜柑……
 甲「ウム、然うだ……其お隣りの方は何方ですお國は……
 丁「私かれ、私ア甲州の郡内でございませう
 甲「ハ、ア郡内と云ふと郡が無へんでゲスカ
 丁「奈是れ
 甲「だつて郡ないといふじやアありませんか
 丁「ハ、ア和郎さんはお話しに成られへ郡はありませう郡内と云つて郡の内と書きますから
 甲「成程此奴ア一本参つた
 丁「時に和郎さんは何所です
 甲「私ア江戸だ
 丁「江戸江戸は何方です
 町邊で……夫れとも神田邊……芝邊りですか
 甲「イヤモ、少し遠い
 丁「在……板橋ですか千住ですか品川ですか
 甲「イヤモ、少し千住の在だ
 丁「へえ、竹の塚
 甲「イヤモ、少し遠い
 丁「新宿邊り
 甲「イヤモ、少し遠い
 丁「水戸でございませうか
 甲「モ、少し此方へ由つて
 丁「ハテナじやアズツと遠く磐城の相馬平
 甲「モ、少し遠い
 丁「冗談被仰つちやア不可ませう然んな江戸に在があるものか何方です
 甲「奥州の仙臺芭蕉ヶ辻と云ふ所です
 丁「恐ろしい遠い所だ……スルと此方からひとり出て来て
 庚「憚ながら皆さん江戸のチヤキチヤキは此所に居ります
 丁「ハア貴郎ア江戸かな
 庚「江戸にも何んにも神田ツ子で明神様の氏子

爲る神様でございませうか
 取「飛んでも無い事を云つて乗の平内じやアございませうか
 乙「だつて能く
 浄瑠璃や何にかの中に雲の神の御紹介……と云ふ事があるじやアございませうか
 丙「夫りやア違ひませう
 甲「へえ、じやア何が祀つてあるんで……
 丙「素盞野雄の尊が祀つてあります
 甲「ハア然ふですか素盞野雄尊と云ふとお神樂でやる剣を持つて身体の大きな髯を生した妙な着物を着た方ですれ成程じやア色の取持ちを爲る神様じやア無へな外に名物がありませんか
 丙「外には蜜柑……
 甲「ウム、然うだ……其お隣りの方は何方ですお國は……
 丁「私かれ、私ア甲州の郡内でございませう
 甲「ハ、ア郡内と云ふと郡が無へんでゲスカ
 丁「奈是れ
 甲「だつて郡ないといふじやアありませんか
 丁「ハ、ア和郎さんはお話しに成られへ郡はありませう郡内と云つて郡の内と書きますから
 甲「成程此奴ア一本参つた
 丁「時に和郎さんは何所です
 甲「私ア江戸だ
 丁「江戸江戸は何方です
 町邊で……夫れとも神田邊……芝邊りですか
 甲「イヤモ、少し遠い
 丁「在……板橋ですか千住ですか品川ですか
 甲「イヤモ、少し千住の在だ
 丁「へえ、竹の塚
 甲「イヤモ、少し遠い
 丁「新宿邊り
 甲「イヤモ、少し遠い
 丁「水戸でございませうか
 甲「モ、少し此方へ由つて
 丁「ハテナじやアズツと遠く磐城の相馬平
 甲「モ、少し遠い
 丁「冗談被仰つちやア不可ませう然んな江戸に在があるものか何方です
 甲「奥州の仙臺芭蕉ヶ辻と云ふ所です
 丁「恐ろしい遠い所だ……スルと此方からひとり出て来て
 庚「憚ながら皆さん江戸のチヤキチヤキは此所に居ります
 丁「ハア貴郎ア江戸かな
 庚「江戸にも何んにも神田ツ子で明神様の氏子

で少し左りへ曲つてるかア知られへが江戸の名物と云つたら大したものでわつで少し左りへ曲つてるかア知られへが江戸の名物と云つたら大したもの
 哥ちが一ツ皆みなさんに江戸の名所をお話はなし申まをしませう 一同「一ツ伺うかひませう」
 庚「先づ江戸の名所と云へば一番が淺草の觀音様一年三百六十五日善男にちぜんなん善女の參詣ぜんによきん人引きも切りれへ賑にぎひさ堂の間口が十八間又主人と云つたなら一寸八分のお姿おすがたで高大無邊の御利益あり(エヘン)何時の頃建立こうこんりういたした
 一イと云ふたなら(浪花ぶし)委くしい事は存ぞんぜれいと覺おぼえましたるあらました
 御客様の御聞おんきやくさまのきこに達たつしまするでーござりませうデレンデイーく 乙「チイ御お職しよく人にん和わ耶ま何を云つてるんだ 庚「然うだつけマア然んな冗談じようたんは止して第一だい立派りつぱなのは大名方の登城とうじやうの有様吉原五丁町の賑にぎひ向島むかふまの花目はなめ兩國にこくの花火深川はなびふかがはの八幡神田明神山王様杯まつのお祭り杯なごきと來た日にやア田舎いながの人は目を廻まはすやうだ 甲「成程 丁「イヤ私わたくしも年に四五度位たぐらぬは江戸へ參

りますが江戸は又格別實またかくべつじつにたいした物でございますヨ皆みなさん 一同「ハア然うださうですかナア 庚「自分の生れた所の自慢じまん斗はり云つて居たつて詮方しかたが無へ…… 此方こつちの御商人和耶おあきんどさん何所どちらでゲスへ 商人「私わたいかなア私わたいは京きやうです 庚「へエ 商「京きやうです 庚「ハテね…… 京きやうですと云ふと何所どこで 商「西京さいきやうです 庚「ウム西京さいきやうか…… 西京さいきやうは大層たいそう好いい所ところださうでゲス が眞實ほんとうかれ 商「夫そりやアモ一貴郎あんだがたいきやはつたら驚おどろきやばるだらう何なに爲しる今帝様の御膝元おひざもとで名所古蹟めいしよこせきの多いのじやア一等とうとうです 庚「ハア何んな所ところがありますね 商「先づ何様な方かたでも知つてやはるのが京きやうの金閣銀閣寺きんかくぎんかくじ、黒谷くろだに、春日かすが、南禪寺なんぜんじ、清水しみず、觀音くわんおん、稻荷山いなりやま、加茂かもの社やしろ、八坂やさか神社じんじや、祇園新ぎおんしん地ち、智恩院ちおんゐん、北野きたの天神てんじん、好いい女をんなで…… 未だ並ならべれば澤山たくさんあるさかい 庚「成程……」と餘念よねんも無く一同話どうはなしに淨うかれて居る熊澤くまざは了海りやうかいは胸どうの間

の方に當つて此話を聞ながらニコリ／＼と笑つて居る内に船は次第／＼に進行して来て今恰好赤馬ヶ關と云ふのへ掛つて來ると空合が急に悪しく成りました船頭が「船サ、悪い雲が出て來た皆さん神信をして下さい強く暴れなけりやア好いが」と心配をして居る内に忽ち摺墨を流したるが如く眞ッ黒に成つて來てポツ／＼と大つぶの雨が降つて來ましたが是れから何う云ふ事に成るか鳥渡一ツ服して深雪に對面の一件りは次に……。

○第十一席

不意の邂逅意の如くならず
風は空く兩人を分つ

能く秋の空は變り易いと申しますが海に出て居ると秋ばかりじやア無い春夏秋冬共に掌を返す内に變つて來る今迄陽氣に話し聲がして居つた船も忽ち深々として仕舞つたポツ／＼と云ふ雨に風さへ加はつてド、

ンと船板を叩く浪の音の物凄いと云つたらば船を宙天に揺上げるかと思ふやうにゴ／＼と上へ持つて行くと今度は奈落の底へ引込まれるやうにス／＼と浪の間へ這入つて仕舞う揺上げ揺下して居るに由つて 甲「南無妙法蓮華經

乙「南無阿彌陀佛 丙「ノーマクサンマンダ……」と各々日頃信ずる

所の神佛を念じて居る心持は無い野尻先生も盡く心配をして 了「弓矢八幡摩利子尊天金比羅大現權船玉明神と一生懸命祈念をして居る内に大部風も静まつて浪の音も静かに成つて 了「船頭く……

船「ハイ 了「大分静かに成つたなア 船「へエ察い目に逢ひました是れと云ふのも皆さんの御信心の庇陰でモ一大丈夫でございますヨ 了「然うかい和郎が大丈夫だと云へば大丈夫に違ひ無い此りやア何所へ來たのだ 船頭「明石の浦でゲス此所でマア船燈火をして明日ア大坂へ着きます御悦び

なさい皆さん 一同「夫りやア何うも有難い 甲「此りやア御武家様でござ
 いますか一ツ切りは生きやうとは思ひませんでした命を拾つたやうな者で
 ございます 了「イヤ實に御互ひ様に御高運のことで悦ばしく存じます」と
 云ふ内に日はドツブリと暮れ渡る時は八月十三日の事熊澤了海船の上へ
 出て来て邊りを見ると十三日の月は眞晝の如くチラ／＼と海原を照
 らして金波銀波の寄せるかと思ふ斗り何が幸ひに成るか此所で明石の月を
 見やうとは思はなんだ好い月でござるなイヤ坐頭さんが 坐「ハイ好い月だ
 さうですが私は月へ物は丸い物が四角なものも存じません 了「夫りやア
 氣が付かなかつた坐頭さんは子供の時から目が潰れたのが中年からかい
 坐「是れでも生れた時は満足だつたんでございます二ツの時に瘡瘡を煩ひ
 まして夫れが目に這入つて斯んなに成りましたから赤いてへ物は何んなもの

か黒いてへのは何んなものか一向私には分りません花なれば探つても見ん
 と云ひますが月じやア詮方がございませんハ、ハ、 了「成程月じやア探
 る譯には行くまい實に瘡瘡へ物は怖いものだ」と熊澤了海に於てはフト
 傍を見ると一隻の大型船がつかないである是れも風の爲に船燈點を爲て居る者と
 見える其船の中に琴の音が爲すから 了「ア、奥床爲きものである」と耳
 を澄して聞いて居りますと實に美音だ、十六七に成る婦人かとも思へば目を
 閉ぢて其曲を聞いて居ると
 露のひぬ間の朝顔に照らす日蔭の情れなくもあはれ一ト村雨のハラ
 くと降れかし
 ともやつて居る 了「ハ、アさいばらの曲を節作りをして調べて居る其糸の
 音色と云ふものは心も自から恍惚たり 了「ハテ……不思議な事があ

るものだ今の曲は予が山城の宇治へ螢狩りに往つたとき矢部の女に認め
てやつたものだが……何うして是れを世間で歌うやうに成つたであらう次
第に由つたら矢部の娘の深雪かも知れないと』は思ひましたが夜るの事と云
ひ向ふの船が大きいから延上つても見えないヒヨイと考へ付いて 『了』モシ
坐頭さん和郎の背負つて居るのは何んだ 坐『是ればウルマ琴と申します九
州地方では大分流行いたします未だ都では餘り調べる者がございませぬ
了』ハアウルマ琴兼て話しには聞いて居たが男の癖に何をするかと笑つしや
るかも知らんが少し私に貸しては呉れまいか 坐『サ、御使ひなさい私
も伺ひますからお武家さんなか／＼多藝で入つしやる御武家様でウルマ琴を
調べる方なんてへ者があるものじやアございませぬ』阿蘇次郎調子を合して
普通の琴の歌では分るまいヨシ深雪が短冊に書いて呉れた戀歌が好いと考

へたから

流れては末のうきみないかにせん

面影へだつ宇治の川霧

と筋付けをして調べて見せましたスルと此方の船の中でヒタリと琴の音が止
んで此方を差して一人の娘が進んで参りました是れは誰であらうか則ち矢部
の娘 深雪であります此船は千二百石積の船で天神丸と云ふ黒田衣紋之助
は菩提所で切腹いたし黒田の家は栗山大膳の忠義に由つて無事に治まり矢
部靱負先生黒田に歸參をば爲る途中此所で出逢つたのであります船椽へ出
て那方此方と見廻して居ると此方は大きい船だし向ふは小さい船だから月夜
だに由つて鮮やかに見へる 深雪『扱ては野尻先生……』とは思つたが供
の女中も居る者だに由つて又船の中へ這入つて心配をして居たが密と一人誰

露のひね間の朝顔に……

も氣の注かないやうに船椽へ出て朝に肌を放さず持つて居たる所の彼の一輪
朝顔の認めてありましたる扇子を向ふへポーンと投げました野尻先生も此
様子を見て扱ては深雪だワイと身を敷しましたから傍に居る座頭の頭へコッ
ンと打突かる 坐「ア、！痛い」日那何か堅い物が降つて来ました何んでこ
ざいませう蠶つて居りますかい 了「イヤ蠶つちやア居ない 坐「好いお天
氣で何が降つて来ました 了「何んだか判然分らないが扇だヨ 坐「へエ
！妙な物が降つて来ましたねチーキに有難ふ存じます 了「請らない洒落を
云つて居る」何んであらうと取上げて見ると

と云ふさいばらでありますから 了「扱ては深雪に違ひ無い」と思つたが邊
りに人も居りまするし又少しく離れては居るし向ふの船が大きいから何う爲

る事も出来ませせんア、！如何いたしたらば好からんかと思案に暮れて居りま
したが同じ思ひの深雪に於ては遂に思ひに堪兼ねましたか覺悟をいたしまし
て口の中に 深「南無阿彌陀佛……」と唱號を唱へて身をおどらせ此船
へ飛込みました唯今も申す通り此船は小さい天神丸は大きい其差が一丈か
らありますから飛ぶにもなか／＼骨が折れまする今上から飛降りて来たから
次郎左衛門ハツと其身体を押へてやる坐頭の頭へボンと打付かる 坐「日那
又何か大きな物が降つて来ました能く何か降つて来ますなア雨じやア無し扇
子じやア無し何んでございます 了「女で…… 坐「女…… 夫りやア珍
らしい物が降つて来ましたなア」ポーンと云ふと絶氣爲る耳に口を寄せて
了「氣を確かに持たつしやい……モシ座頭さん 座「ハイ…… 了「和郎
さん御氣の毒だが少し押へて居ちやア呉れないか 座「畏まりました 了」

私わたしは今水いまみづを持つて来てやるから待つて居て下さい 座わたくし私わたしが急所きふしよを知つて居りますから押おさへてやりませう』と是これから座頭ざとうさんが押おさへる了海れうかい先生せんせいが水を飲のましてやる乗合のりあひの面々めんめんは大騒おほさわぎだ 甲あ『何なにんだ』 乙お『ナニ那所なそこに好いい男をとこの侍ざむらいが居ゐるだらう 甲あ『ウム 乙お『那ちの好いい男をとこに見惚をこみとれて天てんから天女てんによが天降あまくだつて来たきのだ 甲あ『へー天女てんによが天下あまくだつて那あの侍ざむらいに惚ほれたのか 乙お『然さふさ珍めづらしい事ことがあるものだ 甲あ『何なに爲なしても男をとこの好いいのは得とくなものだ』と話はなしを爲して居ゐる内に漸う氣きが注ついて目めを開ひらいて見みると流石さすがは大家たいけの娘むすめ何なんとも云いはず唯たりやうがんなみだなみだなを浮うかめ阿蘇次郎あそじらうの膝ひざへ取とり纏まとつてヨ、と斗はかりに泣ないて居ゐりまする別べつにヤ一戀こひしかつたの逢あいたかつたの嬉うれしかつたと然そんな端はした無ない事ことは云いない其所そのこに價値ねいちがあるので 深あ貴なた郎いっぞうは何日いつぞや宇治うぢの螢狩ほたるがりで御目めに掛かつた阿蘇次郎あそじらうさま様 了し』チ一如何いかにも野尻のじり阿蘇次郎あそじらう……シテ又また御身おみは

唯今ただいまお投げなされた所ところのさいばらで見れば京都岡崎村きやうとうがさきむらに居ゐられたる矢部やべ鞆つば負へどの御息女ごそくぢよみゆめ深雪ふゆきどのと御見受ごみうけ申まをしました何どう云いふ次第しだいで此所こゝへお出いでなされました 深し『ハイ暫しばらくく父ちちも岡崎村おかさきむらへ閑居かんきよいたして居ゐりましたが今度こんど主家しゆか御無事安泰ごぶじあんたいに納おさまりまして今度こんど國くにへお詫わびが叶かなひ唯今ただいま筑前ちくぜんに歸参きさんを爲する途とちう中ちゆうでございます 了し』ハ、ア其それは御芽出度ごめでたふ存ぞんじます然しからば御兩親ごりやうしん共とも相變あひかはらず御繁盛ごはんじやうで 深し『ハイ……夫それに就つきまして切望きつぼう妾めかけを連れて御出いて下さいますやう 偏ひとへに願ねがひ奉たてります』イヤ阿蘇次郎あそじらう困こまつたれ 了し』夫それは不可いかん夫それは拙者せつしや迷惑めいわくをいたす 深し『譬たとへ御迷惑ごめいわく遊あそばしませうとも妾めかけは今更元船いまさらもとぶねへ戻もどる事ことは出来できませんモ一覺悟かくごいたして参まりました 了し』譬たとへ御覺悟かくご遊あそばしてお出いでに成なつたにもせヨ然さう云いふ不品行ふひんかうの事ことは出来できない貴郎あなたの御兩親ごりやうしんに對たいして相濟あひすまん今一應筑前福岡おうちくぜんふくおかへ御歸おかへり下さい拙者せつしやもイザ妻つまを

迎へると云ふ事に成れば玉椿の八千代迄貴女より外に妻に迎へやうと云ふ者は無いと決心いたして居るから吉日を選んで此方から申入れるやうにいたします是非共御歸りに成るやう夫れを僅かの所で唯今御兩親に對しては不孝を相濟まん御兩親から宜しいと云つた譯ではございませぬ一先づ私わたくしの意見を聞いて筑前へ御歸り下さい何とも云はんで深雪は兩眼に涙を浮めモ一阿蘇次郎に斯云はれた事なれば覺悟を斯ふと極めて來たのでありますから隠し持つたる懐劍を抜く手も見せず咽喉に當てアワヤ自害と相見へました其利腕を確中押へ了マア御待ちませぬ何故あつて此自害……涙を流して膝へ縋つて深先生の仰せ一應御道理ではございませぬが貴郎に左様仰せられましたからと云ふて何故あつて私がチメく元の船へ歸られませう筑前に歸りますれば妾は何のやうな憂目を見るか分りませぬ

由つて此場に自害をいたします仰せられますことはいち／＼有難く承はりましたが迎も船には歸られませぬ了イヤ然ふ云はんで深何んと仰せられませうとも迎も歸る事は出来ませぬと思ひ込んだる女の一念なか／＼動く様子は無い了海先生累卵いから手を離す事が出来ぬから了モシ座頭さん少し手を貸してお呉れ座大變な事に成りましたな……何爲る委しい事は存じませぬけれども御見受け申す所なか／＼道德が高くつてお出でなさるから人様の娘を連れて行くやうな事はなさりませぬ委しい理由に存じませぬが先生の被仰る通り故郷へ御歸んなすつて此旦那様が吉日を選んで人を以て貴郎の所へ申し入れると云ふんだに由つて好うございませう然ふなさい私も悪い事は申しませぬ若い内は前後の考へも無く事をなさるが私は此通り年を取つて居りますから何方の最負を爲ると云ふ譯で

はございません是れなり逃げて御仕舞ひなされば何んなに御兩親が御心配なされるか知れません此旦那のおつしやる事は精進潔白の道を守つて入つしやる……然ふなさいく 深『段々との御了解有難うございませすが何うも私は元船へ歸るのは嫌でございませす』テ阿蘇次郎も仕方が無いから了『然んなら御思召し通り貴女を連れて逃げませう然し此儘に立退て見ると御兩親が定めし御歎きなされるでございませうモ一遍船に御歸りなすつて其所謂を手紙に認めて遺書ましてお出でなさいまし決して死ぬ見はございません仔細あつて一度立退きませすと云ふ手紙を書いてお出でなさい左すれば阿母さんなり阿父さんなりへ密と置てお出でなさい然して此方へお出でなさい夫れがよろしからう天地の神に誓つて偽りは申しません貴女の仰せ通りにいたします』其所で深雪も承知して 深『夫れならば然う云ふ事に願ひます直きに参りますから御待ち下さるやうに……直ぐに一言認めて参ります傍に聞て居りましたる所の按摩も 座『然うなかつた方が宜しい 了』サ、深雪も承知爲たから……』と云つたが上がる事が出来ない、野尻先生が了『按摩さん誠にお氣の毒だがチョット肩を貸しては呉れまいか 按『サア御易い御用で』と按摩さんの肩へ載つて深雪が向ふの船へボンと乗る 按『ア、一好い香いだ氣を悪くしちまはア』と云ふ内に船の中へ這入つて仕舞う扱て野尻先生が深雪を連れて往つてやらうと云つたのは是れ虚言でございませす苟も其身は學者で聖賢の道を守つて今日を送つて居る者が然んな不道德な真似はいたしません野尻の考へでは向ふの船へ返してやればモ一遣しやア爲ない是れで安心だと思召して自分に船の中へ這入つて仕舞う成程推了の通りで此方の船ではサアお娘さんが見へなくなつたと那方此方を探し

に参りますから御待ち下さるやうに……直ぐに一言認めて参ります傍に聞て居りましたる所の按摩も 座『然うなかつた方が宜しい 了』サ、深雪も承知爲たから……』と云つたが上がる事が出来ない、野尻先生が了『按摩さん誠にお氣の毒だがチョット肩を貸しては呉れまいか 按『サア御易い御用で』と按摩さんの肩へ載つて深雪が向ふの船へボンと乗る 按『ア、一好い香いだ氣を悪くしちまはア』と云ふ内に船の中へ這入つて仕舞う扱て野尻先生が深雪を連れて往つてやらうと云つたのは是れ虚言でございませす苟も其身は學者で聖賢の道を守つて今日を送つて居る者が然んな不道德な真似はいたしません野尻の考へでは向ふの船へ返してやればモ一遣しやア爲ない是れで安心だと思召して自分に船の中へ這入つて仕舞う成程推了の通りで此方の船ではサアお娘さんが見へなくなつたと那方此方を探し

て居るモシや船と船との間へでも落ちたのじやア無かと云つて其心配は一方ではたりません 甲「先刻月を見て入つしやいましたは何所へお出でなすつたらう」と云ふ所へヒヨツクリ深雪が出て来たから一同の者は驚いて 甲「マアお娘さんがお見へに成りました 靱負「エツ娘マ出て来た……コレ娘何所へ往つて居たのだ不思議な事があるじやア無いか何をして居たんだ 深「ハイ餘り月が宜うございませうから船様の處に參つて月見をいたして居りました 靱負「ア、一累卵の事だ一人で月見杯を爲ちやア成りませんなぜ供を連れて參らんのだ夜るの事であるから足でも踏すべらして海中へでも落ちたら如何いたす人が知らなければ夫れ迄だ命を落さなければ成りません怪からん事だ月は甲板に限つたことにはない何所からでも見られます又今晚の月よりは未だ明後日は十五夜だ又外の眺めの好い所で月を見なさい

以來は船椽へなんぞ出ちやア成りませんヨサ、寢なさい 深雪「誠に畏れ入りました」逃げやうと思つたが何うも隙が無い其内御兩親の間へ寢かされて仕舞つたから何う爲ることも出来ません小便に行くと云へば女が尾て来るし横には成つたけれども寢られやア爲ない何卒御兩親が……と思つて居る内に夏の夜の最と短かく夜はホノノと明渡つて仕舞ひました 船頭「エンヤ……チーヤ……」と云ふのは碇を上げる掛聲 忽ちにして碇を上げる帆を巻上げる 順風に帆を孕まして明石の浦をドン／＼走つて行くが 深「アレー此船をやつては成らん此船を……」と悶けど焦れど固より走つて行く船でありますから何う爲ることも出来ません回顧つて野尻の方を眺めたが船は次第／＼に進行して今は野尻の船が漸くに二尺斗りに相成りました 深雪「ア、情け無いことである嗚や野尻様が情け無きやつと御

恨みなされて居らせられるであらう翼があれば飛びもせん魚なれば泳ぎもせん如何いたして好からうか寧ろのこと一思ひに此水中へ飛込んで死んでも那の船へ漂わうか……』と眼は血走リアワヤ水中に身をおどらせやうといたしましたが流石は利口な娘トタンバへ来て考へた 深雪待てしはし此所で斯うして死んだなら添うにも添はれず犬死に成らなければ成らん譬へ此處で一度はお別れ申すとは云へども夫婦にならで置くべきや夫れ迄は大切なる此身の上此所は霎時の辛抱所じやチ、然うだく』と胸に問ひ腹に答へて氣を取直し涙ながらに深雪は心にも無き所の筑前福岡へ途に立歸りました。

○第十二席

蕃山途に勇仙に逢ふ
勇仙困窮を訴へて居候となる

エ、扱てお話し變つて此方は熊澤了海の野尻阿蘇次郎は先づ無事に船で大坂へ着いたして一晩泊つて翌日京都へ立歸り相變らず以前の弟子を取つて居りましたが或日の了海は又弟子に誘はれて四條川原へ涼みに出掛けました何爲る京都四條の涼みと来た日にヤ日本隨一の場所で大した人、了海は人の出る場所は嫌ひでありますが涼みと云ふから来たんだが何うして涼み所じやア無い 了馬場之丞和郎涼しいから行けノと云つたから来たが是れじやア涼み所じや無いじやアないか却つて御苦しみだ此位なら家の椽側にかマでも敷て涼んで居る方が餘つ程好い 馬』イエ所が今日は飛んだ事を仕ました何時もは斯んなに込みやア爲ませんが今日は八坂神社の大祭で其人達が皆んな此所へ押掛けて来たから斯んなに人が出るんで何うも誠にお氣の毒様でございます 了別』別』和郎も悪氣で私を引ツ張り出

した譯じやアあるまいが斯う混んでは詮方が無い歸らう 馬「マア好いじやアございませんか其んなに急がなくなつて……」
 了「奈故 馬「モ一先生家へ歸つたつて御休みに成る斗りでございませう 了「然うさ 馬「夫れじや好うございませう段々更けて来るに從つて冷つこい風が吹て来ますから……」
 ……ソレ御覧なさいア一好い風だ 了「成程此りやア好い風だ」と胸を擴けて風を入れ暫く此所に涼んで居ります内にモ一四ツ過ぎでございませうから
 了「サア歸らう 馬「じやア歸りませう」と二人が此所を出て己れの家へ歸らうと爲ると何爲る大勢の人で途々馬場之丞とはぐれて仕舞ひました 了「ハテ何うしたのであらう」と邊りをチヨロ／＼爲て居る所へ後から一人袂を曳く者があるヒヨイと回顧つて見ると見たような男組の紋付きにチヨイと爲た着物を着て居る不審に思つて 了「是れは誰方でございませう 男「イヤ

御忘れなさいましたか貴郎は確かに備前岡山にお在なされた熊澤了海先生……」
 了「如何にも拙者は了海でござるが貴郎は……」 男「拙者は同じをかやまをく岡山に居りました醫師勇庵の悻の勇仙でござる 了「チ一然う／＼是れは飛んだ失禮をいたしました遂御見忘れ申しまして扱ては勇仙殿でござつたか何うして此方へ……」京見物にでもお出でなされたか 勇「イエモ一遠から此方に居ります先生の下河原にお出での事も伺ひました 了「ハ、ア誰に……」 勇「拙者共に居りましたる弟子の貞庵に承はりました 了「ア、然うですか……」貞庵は何所へ參つたか行方知れずに相成つて仕舞ひました 勇「夫れに就きまして私も實に當惑して居ります全体那奴は不都合な奴で國に居ります時拙者を誘ひ出して散々遊びました未だ不都合な事をいたした此處へ逃げて參り昨年でございませうした圖らず彼奴に逢ひま

した所ところが恐おそろしく面目めんぼくなかりまして夫それつ切り何所どこへ参まゐりましたか姿すがたを見
 せません實じつは先生せんせいが御存ごぞんじであらうと存ぞんじて御宅おたくへ伺うかがひました所ところが御國おくに表おも
 へ入いつしたと云いふ事こと好こい所ところでお目めに掛かりました貞庵ていあんの住所じゅうしょは御存ごぞんじでござい
 ますまいか 了そ夫そりやア思おもひも寄よらんお尋たづねで拙せつしや者しやとても一向かたに存ぞんじませ
 ん 勇むハア夫そりやア困こまりましたなア何どうも 了な何なにか御用ごようですか 勇むハ
 イ色いろ々く……』と云いつたが實じつは和郎わらうさんの替玉かへだまに矢部やべの家うちへ参まゐりましたとも
 云いへないから黙だまつて居ゐる了れう海かい然ぜんんな事ことは知しらない 了い今は何方どちらにお出いで
 勇べつ別に何方どちらと云いふ事こともございませんが唯ただ今の所ところ三條大橋でうおほはしの宿屋やどやに居ゐ
 ますがモ一こ小遣こづかひも手薄てうすに成なりまして碌ろく々く國くにからも送おくつて呉くれませす如何いか
 でございませう先せん生せい御同國ごどうこくの好誼よしみで少すこし私わたくしを置おいちやア下くださいませすまい
 か』と白癩はかだからズー／＼しい了れう海かい覺おぼへのある事ことで誰たれしも錢ぜにが無なくつて宿やど

屋やに居ゐると云いふ奴やつは心細こころほそいものだと思おもひましたから 了いア、御易ごやすい事こと
 だ男をとこ世帯じたいで旨うまい物ものも御馳走ごちさうも出で来きませんが夫それで宜よろしけりやア拙せつしや者かたへ
 お出いでなさい 勇むイヤ早速さつそくの御承引ごしょういん辱かたじけ無ない然しからば御供ごともをいたしませ
 う』と途とちう中で食いさうらふ客たのを頼たのむ杯などは酷ひどい奴やつで了れう海かいの跡あとからボツ／＼尾行ついでて來きる扱さ
 て下河原しもがはらへ歸かへつて來きて勇庵ゆうあん了れう海かい方の食いさうらふ客たのに成なりましたお弟子でしが多いから
 弟子でしが飯めしを炊たく掃除さうぢを爲する別べつに勇庵用ゆうあんにようが無ないから朝あさも容よう易いには起おきない
 居候ゐさうらふ置あて合あはず居ゐて合あはず
 居候亭主ゐさうらふていしゆの留守りゆうしゆにして候さうらふ

杯などと居候ゐさうらふの川柳せんりうは澤山たくさんあるが餘あまり好いいものじやア無ない朝あさ起きて楊子やうじを
 使つかつて飯めしを喰くうと正午ひるに成なる外ほかの者ものが御飯ごはんを喰たべると又一また一しよ緒たに喰たべる夫それか
 ら小説せうせつほん本の少すこしも讀よんで書ひる寝ねをして起おきると晚飯はんめし、晚飯あさめしを喰くつて仕舞しまうと

ゴロリと寝て仕舞う喰つちやア寢起きちやア喰つちやア寢て斗り居りまして横の物を縦にも爲ませんけれども阿蘇次郎先生は鷹揚な人でありますから決して然んな事には氣が注きませんが……好しんば氣が就いた所がグズく云ふ人じやア無い黙つて腹の中へ疊んで仕舞つて置くけれども弟子が承知爲ません 甲「何うだい近藤」 近藤「エ、 甲「今度来た居候は何うだい」 近「驚いたなア」 甲「驚いたつて来た日から喰つちやア寢起きちやア喰つて寢て斗り居やアがる呆れ返つて物が云はれれへ」 近「然ふヨ夫れも好いけれども居候の癖に水を一杯汲んだことがねへ朝起きて壺所へ來やアがつて顔を洗う水が無へと瓶の中へ杓子を突込んでカラ／＼と掻廻しながら尊公や乃公の面を見て居やアがる知らん振をして居ると汲んで來て呉れねへと思つて飲水でチヨイ／＼と目と口だけ洗つて置きやアがるおまけに据膳で

飯を暖やアがつて汝エの茶碗を洗つた事が無へ 甲「何うだい一ツ先生に歎願して那奴ウ押拂つて仕舞はうか」 乙「能からう」 丙「イヤ然し先生の事だから其所が辛抱だなんて云つて容易に乃公達の云ふ事を採用げて呉れめへ 甲「呉れなかつたら構はない然らば吾々一同退校をいたしますと云はうじやア無いか先生だつて弟子が可愛か居候が可愛いか其所等ア分りそうなものだ」 乙「成程夫れが好い」と其所で相談が整ひまして一同了海の前へ並び 甲「扱て先生斯々云々で何分にも那の方を置かれては吾々が勤まりませんから断はつて下さい夫れも先生の御身内だとか何んとか云ふのなら又勘辨の爲やうもございませすが承はる所赤の他人の由迎も我々には世話が出来かねますから切望御追放を願ひます」 了「御道理千萬飛んだ厄介者を引張り込んで來て和郎方に迷惑を掛けたが私も頼まれて據る無くマア連

れて来たやうな次第で然ういつ迄も厄介に成つても居まいからモ一少しの所
 御世話を頼む 乙「イエ夫れが普通の人間なればナニ此人数の中へ一人や二人
 殖たからといつて構やア爲ませんが實に那奴は一通り成らねへ奴で御宅へ
 上つてから今日まで那奴が横の物をたてにしたのを見た事がございませぬ餘
 りと云へば思々爲い奴でモシ強つて先生が彼れを置くと被仰れば詮方がござ
 いませぬから拙者共一同甚だ不本意ではござるが御暇を戴きます
 了」成程然し如何に世話が爲たいからと云つて弟子を棄てても居候の世
 話をしやうと云ふ事は出来ない』後の方で 丙「占めたく先生我れくの
 計略に落ちた 乙「黙つて居たまへ 了」夫れ迄に仰せあるなら據る無
 い那の勇仙を断ばりませう 甲「夫れじやア然う云ふ事に願ひます 了」勇
 仙を此所へ呼んで下さい 甲「未だ寢て居ます 了」何時だ 甲「モ一四ツ

でゲス 了」チヤチヤ困つたものだモ一直きに起るだらう然らば起きてか
 らで宜い 一同「へエ……」と一同は引去がりました良あつて勇仙寢姿ツ
 面をして弟子の部屋へ出て来て 勇「お早う……」 甲「勇仙さんお早い
 どころ 所じやア無いモ一四ツだよ 勇「譬へ四ツが八ツだらうが人間の挨拶だか
 ら詮方が無い女郎屋へ往つて見玉へ三日居残りをして歸つても御早い御歸り
 と云ふじやア無いか此りやア通言葉だから詮方が無い 甲「何も起きて早々
 女郎屋の引事をして論を爲るにも及ばない 勇「論を爲るには及ばないと云
 つて貴様達の方で言葉咎めを爲るからさ……マア何うでも好い蒲團をた
 んで呉んな 乙「糞を喰やアがれ籠棒奴乃公達は月に食料が如何程月謝が
 如何程と云つて金子を拂つて修業に来て居るのだ居候の蒲團を疊みに来た
 のじやア無いや 勇「大層今日は強い事を云ふマア、好い顔を洗つて飯を

喰ほう』しぶく立つて顔を洗つて来て今日は誰も膳立を爲て呉れないから
自分で膳立をして御飯を喰べて仕舞うと如何相成るか次回に……。

○第十三席

勇仙追はれて蕃山を根む
雪夜蕃山酔ふて漫歩す

さうすると弟子が 甲『ナイ勇仙さん 勇』エ、 甲『何んだか先刻から先生が呼んでるぜ 勇』先生が……然うか何御用だらう……へエ先生御早うございます 了』餘まり御早くも無いぜ何時だと思う 勇』恐り入ります 了』就ちやア勇仙さん外じやア無いが今日は改めて和郎に少し云はなけりア無らんが實は和郎と外日四條の涼みで逢つて別に大した懇意の中じやア無いが當分置いて呉れると被仰つだからお連れ申して来たんだが 勇』へエー 了』御覽の通り追々弟子は殖て来るし女ツ切れは居す中々男共の手じやア

人一人でも御世話を申すことが出来ない由つて和郎も嘸御困りだらうが此りやア少ないが路金にして國へ歸つては呉れまいか 承はる所御國の家も別に縮尻たと云ふ事も聞かんから國へ歸つて阿父さんの傍で御孝行をなさい悪い事は云はん拙者方は今日限り御断り申す』とキツパリ云はれ勇仙はハツと途方に暮れて 勇』是れは先生恐れ入つた御一言何か御腹が立ちましたかは知りませんが悪い事がありますれば私が御詫をいたします切望御勘辨を願ひたいもので 了』イヤ〜決して和郎さんに落度がある譯じやア無い今も云ふ通りだから止を得ないので 勇』テございませうが』とヒヨコ〜頭を下げて居る障子越しに弟子が 甲『好い氣味だ 乙』面ア見やアがれ』と云つて居る 了』コレ〜誰だい其所へ来て何か話しを爲て居るのは那方へ行きなさい 一同』へエ 了』決して勇仙さん、和郎さんに悪い事は更ら〜無いので

あるから心持を悪くせずには歸つて下さい 勇「然うですか宜しうございま
 す然う云ふ理由なら永々御厄介に成りましたが今日限り御常家を引拂ひま
 せう」と云ふのは白痴だから勇仙考へて 勇「此りやア何か腹が立つ事が出
 来たのだらうハテナ去年乃公が阿蘇次郎の替玉で矢部の所へ往つたのが知れ
 だかな」未だ矢部が國へ歸つた事は存じません 勇「全体此女は男が好い乃
 公だつて萬更捨てた男じやア無いけれども阿蘇次郎には叶はない全体此奴が
 あるから乃公が深雪と云ふ娘の躰に成れないのだシテ見れば此奴は乃公の戀
 敵だ寧ろその事此阿蘇次郎を殺して何んとか工夫をして矢部の躰に成らうみ
 すく喰ふに困つて居る乃出を追出すてへのは人情の無い奴だ今日までは
 色敵だとは思つて居たが世話に成つたから我慢爲て居たのだが今日から世
 話に成らなけりやア遠慮爲る所は無へ好しく此男を殺して戀の遺趣晴し

を爲て夫れから乃公が躰に乗込まうと白痴な奴で詰らぬ事を思ひ付きました
 から 勇「宜しうございます今日限り引拂ひます」と云つて別に是れと云ふ
 荷物もありませんから着替の着物を二三枚持つて腹立紛れに路金も貰はず
 一と下河原の家を立出て佛光寺門前と云ふ所へ往つて唯今で云ふ木賃
 宿見たいな宿屋へ泊り込み阿蘇次郎を深く恨み外へ出たら殺そうと様子を
 日々伺つて居りました阿蘇次郎は然んな事は夢にも知りません其年十二月
 二十五日の事で弟子に赤松源藏と云ふ者が居りました其者が来て 源「扱
 て先生今年私共では年忘れをいたそうと云ふ事で別に何も差上げる者
 はございませんが親父の申しますには是非先生をお連れ申せと云ふ事で御迷
 惑ではございませうが夕景から一ツお出でを願ひたいものでございます別に
 遠慮の者も居りません唯親類一家見世の者杯でございますから大抵先生

御存じの者斗りて 了「ア、一然うかい夫りやア辱け無い折角のお招き故夫れじやア今晚参りませう」と云ふので早速承知をして熊澤先生に於ては夕景から仕度をいたして下河原を立出て程遠からぬ下島と云ふ所の彼の赤松源藏の家へ参りました此者の父は立派なる商人で有まして西陣に罷り在り下島の家は別荘であります此家へ親類縁者知己友達を招きまして今宵は忘年会と云ふサア飲みヨ唄への大陽氣然るに一同は 甲「先生お一ツ……」 乙「へ先生御一ツ 丙「野尻先生御知己に……」と四方から盃を差す迷惑には思うけれども折角差されるものに由つて困るとはいへ詮方が無いから受けて一杯飲んじやア御返盃と云ふやうな譯で思ひの外酔も出まして色々世間話しや歌俳諧武術文學の話しに時を移して居ると耳許に響くポーン……ポーンと云ふ鐘の音に心付き 了「イヤ是りやア思はぬ長座を

いたしました今打つたのは平等院の四ツの鐘イザ御暇といたしましたまう」と云ふ 一「ア能いじやアございせんか其所迄御一緒に行きませう」と云ふ人もあつたが 了「イエ急ぎますから一ト足御先へ……」と厚く御馳走に成つた禮を述べて外へ出やうと爲ると宵から疊つて居たと見へてチラ／＼ 源「チャ先生白いものが降つて來ました何うです御泊んなすつちやア 了「イヤ一抔機嫌で雪が顔へ當ると云ふは又一興是非歸りませう源「然うですか然らば御傘を」と傘と高足駄二重廻しの合羽を借りまして源「御宅迄御送り申しませう」と云ふのを 了「ナニ夫れには及ばん和郎が送つて來て呉れて弟子を又付けて遣こす弟子へ又和郎の方から人でも付けて呉れるやうじやア夜通し往つたり來たり爲て居なければ成らんから 源「左様ですか夫れじやア御静かに……」と玄關口迄送り出す了「海は合羽は

を縮めて足駄を穿き蛇の目の傘を斯う持ちまして了「ア、一宜い心持だ」と足別義輝公の塚のあります所を過ぎてだんく、来る右手は名に負ふ宇治川の下手左りては一面の水田、其所を過ぎて岩觀月橋を渡らうと爲た時に向ふからバラくく一人馳けて來て了海の差して居る傘へドンと突當りましたが是れ何者が次回に言上をいたします……。

○第十四席

蕃山、勇仙を殺して罪なく再び備前公に仕る事となる

了海は大きに驚きまして了「ハッ」と体を變すと彼の曲者は空を打つてヨロくと跟めく了「ア一人里離れた觀月橋今時分斯る怪しき光景にて徘徊いたして居るは物取りなるか但しは何者である無禮を爲るな男エ、八釜敷いグツく云ふな誰でも無へ拙者だ」と冠れる手拭ひを取れば這は

如何に永らく己れの家へ置きましたる所の勇仙でありますから了「ア、一其方ア勇仙じゃア無いか勇如何にも勇仙様だ了「何故あつて斯る所へ今時分……勇然ふよ大抵は察したらうが其方の命を貰ひに來たのだ」了海大きに嘲笑ひまして了「小賢かしき其一言然し何んで拙者の命が慾しいのだ勇汝エが居る斗りに己れの戀が叶はれへ由つて貴様を殺して乃公が矢部の深雪の所へ聳に這入らうと思うのだ了「成程勇仙和郎は人が云ふ通り白痴に違ひ無い何う云ふ譯で和郎に私が戀の邪魔をして居るか知らないがモ一矢部の屋敷は京都にはありやア爲ない勇エ……ド何所へ往つて仕舞つた了「モ一疾の事矢部の一族は舊主人黒田の家へ詫か叶つて歸つて仕舞つたヨ勇エ……ハテ残念……了「何が残念だか知らないが勇仙和郎は醫者だ私は瘡せても枯れても武士の家に生

れた者もの和郎杯わらうばいに「メ」と殺ころされるやうな私わしでも無いな然そんな分わからない事ことを云いはないで順柔すなほに歸かへつたら宜よからう………
 勇ゆう「イヤ歸かへれない固もとより拙者せつしやは命いのちは無いな覺悟かくごで來きたんだ斯かう成なりやア色いろの遠恨いんげん斗はかりじやア無いな外いっせやわし日私ひしを何科なにがあつて追出おひしたか口惜くやしくつて詮方しかたが無いなサ覺悟かくごを爲して貰もらひませう」と隨す分ぶん分わからない野郎やらうで白刃しらばを抜ぬいて切きつて掛かりますから大人氣おとなげ無い事ことだとは思おもつたがマゴく爲して居ゐると命いのちが無いなから「了せつ殺生しやうを爲するのは罪つみだが斯かう成なつちやア背せに腹はらは替かへられまい觀念くわんねん爲る」と酔よつては居ゐるが熊澤くまざは了れ海かい同おなじく大刀たを抜ぬき合あはせましてしばらくの内うちは双方さうほう必死ひつしと成なつて雪ゆきの中なかに立廻たちまはつて居ゐりましたが逆とても了れ海かいに叶かなうものでは無いな隙すきを見て手許てもとへ踊おどり込んで遂とう々く勇ゆう仙せんを其所そのへ切倒きりたほして仕舞しまつて「了れサア大變たいへんな事ことを爲した酔よつて居ゐなきやア峯みね打うちにでも爲して置おくのだが遂とう々く殺ころして仕舞しまつた人ひとを殺ころせば我身わがみも夫それだけの

罪つみを受けなげりやアならない此こりやア何どう爲したらば宜よからう」と刀かたの血のりを拭ぬひながら考かんがへました大抵たいていの者ものなら逃にげて仕舞しまう所ところだが聖賢せいけんの道みちを學まなんで居ゐる了れ海かいの事こと故決こつて逃にげるの隠かくれると云いふ事ことは無いな途つひに自首じゆと決けつ心しんをいたして其足そのあしで直すぐ七條しちじょうの番屋ばんやへ自首じゆに及およんだ容易よういならぬ事ことと直様すいさま夫それへ通知つうち爲したから役人やくにんが出しゅつ張ちやう爲して調しらべて見みると成程なるほど了れ海かいの申まをしたる通りとほでございませす、だんく奉行所おぎやうしよへ引立ひきたて、調しらべて見みると勇仙ゆうせんが如何いかにも悪わるい別べつに阿蘇次郎あそじらうに是れと云いふ罪つみがありません身分みぶんはと云いふと備前びぜん岡山かみ池田いけだ新太郎しんたろう少將せうしやう光政みつまさの家來けらいだと云いふ其所そので問合とひあはして見みると全くまった備前びぜんの家來けらいでございませす、折節をりふし新太郎しんたろう少將せうしやうが江戸表えどおもてから仰おほせ越こされたには江戸國えどくにの政治せいぢを熊澤くまざはが直なすかつまたよらんぎやうも彼れかの爲ために改あらたまはたした功こうがある三ヶ年ねん間かん暇いとまを呉くれると云いふので出でたが唯今たいま以もつて何なんの沙さ

汰も無い、彼れを其儘にして置いては江戸國に目の明た者が居ないよりに世
 間で思うに由つて早々次郎左衛門を探して重く取立てよと云ふ仰せ、畏まり
 ましたとは云つたが扱て何所の果に何うして居るか更に分らない、何う爲た
 らば能からうと云ふ所へ京都所司代から右の問合せでありますから爰に漸
 く居る所が分りましたして直様迎ひが参りましたに由り今は辭すべき言葉も無
 いに由つて其迎ひの者と共に岡山表へ立歸つて参りまして食祿三千五百石
 を賜はり國の政事を預かる身の上と相成つた又一説には最初一萬石を賜つ
 て直ぐ二萬石に出精をしたと云ふ事でありますが成程二萬石位あの價値の
 あつた人には相違ない、されども他の家來の思はく、又國主大名無事であ
 りますから一人に然ふは食祿を下さらなかつたに相違無い、却説又々殿様
 のお供をいたして江戸表にお出でに成りまして久々で江戸勤番で岡山藩中

の熊澤と云へば誰知らぬ者は無いやうに相成り上下共に先生くと云つて
 用ひられて居りました、お話し變つて矢部鞆負に於ては天神丸で無事福岡
 へ着し積高三千五百石にて再び御奉公をして相變らず忠義をつとして居る
 内に三ヶ目に江戸詰勤番を申付けられ、江戸表霞ヶ關の御屋敷へ御自
 分だけ家米を連れてお出でに相成り、一生懸命忠義を盡して居る傍ら相
 變らず如深雪の事を御心配なすつて 鞆負「切望好い所へ嫁にやりたい」
 と思召して居る、所が長し短して無い、スルと爰に江戸麴町一丁目刀
 屋で佐野屋幸三郎と云ふ人があります、兼て霞ヶ關へお出入りでありま
 すから今日も風呂敷へ刀を包んで霞ヶ關へやつて来て矢部の御小屋へ來り
 幸日那今日は……御機嫌宜しう…… 鞆負「イヤ誰かと思つたらは
 佐野屋か、何か珍らしい物を持つて來たか 幸「へい何目にもよりの品斗り

持つて参りまして御笑ひ草で誠に恐れ入りました、今日は旦那様に御氣に入らる物を持つて参りました。鞆「ア、然うか」風呂敷の内から取出だしたるのは二振り共棒鞘でございます(棒鞘と云ふと白鞘です)鞘を拂つて見ると一ト振りは正宗、一ト振りは新刀で、こそれれ大村个北の作で二尺三寸、大村正左衛門个北と云ふ人は名人には違ひ無いが終りが悪いから人様が用ひなかつた、其理由如何となれば夏の事で个北が所表でもつて小用を足して居たがスルと不意に一人个北の後から切付けた者がある、右の手でもつて受け拂はうとしたが右の手を切つて落され、アツと云ひながら左の手を差延べて遂々向ふの奴を取押まへて下へ組伏たが下から其者が个北を突殺した、个北は右の腕を切られ

出て居る骨で咽喉を押し遂々下の奴を突殺して仕舞つた、死人に口無で何う云ふ理由だか分かりませんが何うも侍の魂しひに爲やうと云ふ物を斯う云ふ終りの悪い人の作は誠に心持が好く無いと云つて人が用ひませんでしたが兎に角名人です、矢部鞆先生しみてと見て居りましたが、鞆「成程幸三郎豪い物を今日は持つて来たの、此方はモ一云はずと相州物正宗だ此方は个北じやア無いか珍らしい刀を持つて来た」幸「誠に御目利の程恐れ入りました仰せの通りで……」鞆「何所から出た」幸「高家で稲川様の御家中から出ました少々都合があつて拂ひたいと云ふ事でございます」鞆「宜しい品物は確かだ、上等だ何時のとは違ふ」幸「左様でございませうか、夫れで大きに安心いたしました、御當家へ片付きませんければ又他へ嫁の口がございます」鞆「何所へ持つて参る」幸「エ、備前岡山様の御

家中でママ首尾好く参れば又一杯飲めます大村の方は向きが悪うございませ
 が相州の方は先づ旨く嫁に行くだらうと存じます 執負「備前の御家中で何
 んと被仰るお方だい 幸「は、當時御評判の高い熊澤次郎左衛門蕃山先生
 と云はれて執負は耳を引立て 執負「然うか、大層此節熊澤先生と云つ
 ては御評判が宜しいが何んでも備前の殿様が御亂行を御諫言申上げて江
 戸國の政治を改革したと云ふことだが然うか 幸「左様でございます、是非
 私に嫁に爲する心得でございます 執負「少し待て刃で思ひ出したが何か
 其お方無妻が 幸「エ、ムサイ所じやアございません三千五百石の殿様で
 ス、なか／＼御屋敷だつて立派なものでムサかアございません 執負「イヤ
 話しが違う、然ふじやア無い、奥様があるか 幸「ア、然うでございますか
 エ、早く女房持つと修業の妨げにも成るし面倒だから當分女房は持

たない、所が毎日／＼と嫁の口があります、嫁の口がありますと云つちやア
 入れ代り立代り九人十人宛参ります、夫れをいち／＼断はりますので、何
 うも夫は／＼は断はり切れないものでございませすから御門の所へ縁談御断
 はり申候、夫れでも来るもんでございませすから支關係の所へ家來が一人
 断はり役と云ふのがあつてソレ縁談ヤレ縁談と云れてモ一大變な騒ぎでござ
 います 執負「虚言を吐け時に幸三郎其方にも兼て話した通り國表に私
 の娘が一人居る乃公も三千五百石熊澤先生も三千五百石だ、何うだらう
 乃公の娘を貰つちやア下さるまいか 幸「ヘエ……兼て夫れは承つて
 居りますが御縁談は何うでございませす 執負「縁談か、縁談は先づ親の口か
 ら申すも耻かしいが十人並先づ耻かしく無い、藝は琴、胡弓、三味線、雙語
 六、歌、讀書何んでも一通りは仕込である 幸「エ…… 執負「一ツ熊

澤先生の所へ話を爲て貰ひたいものだが何うだらう 幸「恐れ入りま
す、貴郎様がお頼みでございませうから實に纏めたいのでございませうが夫りや
ア無益でげせう断はり役人が幸三郎和郎にも似合ん事だ、平生から縁談の
事をモシ傍で聞かれたら其場で断はつて呉れると云つてあるじやア無いか刀
の方なら好いが縁談の事は御断はり申ますと云はれて仕舞やアモ一夫れつ
切りでございまして別に返す言葉もございませぬ、テガスから外の事なら何
んなお頼みでも承知爲ますけれども是斗りは一ツ御免を蒙ります 鞆負
イヤ道理な譯だ無理な事を申すやうだか一ツ無駄だと思つて話を爲て呉れ
幸「へエ然う被仰るなら随分持込んでも見ませうが幸三郎はおチャチャ
ラ者だから困る、先方へ持込んだのだから中へ這入つて自分で勝手に断つたの
だか知れやア爲ない杯と仰せられちやア困ります、何うも断はられますので

グスから 鞆負「宜しい、先方様の年齢は何歳位ぬだ 幸「先生は廿七八
鞆負「娘は當年二十二才、今も云ふ通りで別に病ひも無し美くしい 所は親
の口から云ふでも無いが 幸「モ一宜しうございませう……分りました、能
く世間で男の子は男親に似る、女の子は女親に似ると申しますが……
鞆負「然うく其通り娘は私に少つとも似ちやア居ない 幸「夫り
やア然うでございませう貴郎に似ちやア大變で髪が白髪で…… 鞆負「白
痴ア云つちやア不可ない娘を生んだ時分なら白髪は生へては居ない 幸「イ
ヤ然らば話しはいたして見ます、承知が無ければ私は参りませんからテ先
方で好い返事なれば今明日の内に早速参り申上げる事にいたしますから
其思召して切望 鞆負「念の入つた事である 幸「其所で旦那様何んでご
ざいませうが首尾能く纏つた曉には定めし私にお禮が何分かございませ

うなア 鞆負「夫れは私が和郎に唯骨を折らして黙つて置く譯にも往かんテ首尾宜く往けば禮を爲る 幸「有難い仕合せ何の位か 鞆負「困つた男だ。二十五両金進ぜやう 幸「二十五両、夫りやア何うも有難う存じます尙ふ様も三千五百石、二十五両は下さるだらう合して五十両……切望旨く纏つて呉れれば好いが断はられては夫れ迄のこと……ナニ當つて碎ける遣つ付けます 鞆負「コレ、幸三郎「刀ア持つて往かんかい 幸「ア、一然うくイヤモ、大切の物を忘れました」一ト振りの刀ア肩に擔いて 幸「左様なら……」と鞆負の屋敷を飛出してトウ、大名小路の備前様の御屋敷へ……熊澤の勝手口から 幸「今日は…… 家「イヤ幸三郎、旦那様が御待兼ねであつた 幸「ハア左様でございますか。是非近日昇がると申上げて置きましたから……御無沙汰をいたしました」案内に従つて奥へ

通る「了海先生相變らす書見をなすつてお出でなさる 幸「旦那様今日は……」 了「イヤ誰かと思つたらば幸三郎ア、此方へ來なさい、先だつて頼んで置いた品物は何うだ 幸「品物は此所へ持参いたしましたがマア何うでも宜しうございます 了「妙な事を云ふ奴だ商ひに來て商賣が何うでも好い奴があるかい 幸「へエマア…… 了「何をモシクして居る、此方へ來なさい 幸「へエ有難う存じまして……五十両……二十五両に二十五両か旦那五十両の一件でございます 了「何んだい五十両と云ふのは刀の價かい 幸「イエナニ……マア切望首尾克く往けば好うございますが……」 了「エ、扱て旦那様外の事でもございませぬが 了「何んだ……刀を早く出したなさい 幸「刀ア後にしてマア早速申上げますが扱て旦那様外の事でもございませぬが 了「何んだ 幸「お頼みでございませぬが去るお方で……」

…と云つた所が顔が赤くつて引掻くと云ふ次第じやアございませぬが其方に
 一人の娘があつて了『コレく幸三郎兼て其方に云つてあるでは無
 いか志願の筋があつて暫くの間は女房は持たんと其方に断つてある夫
 れと知つて居ながら然んな事を云つて来ちやア困るじやア無いか、幸『夫れ
 だから私が御願ひ云て斯う申上げて置いて序開きを爲たんでゲスが……五
 十兩……縮尻つたかな……マア旦那無駄だと思つて御聞遊ばせ御承知が
 なければ夫れ迄の事貴郎に強つて貰つて下さいと云ふ譯ではございませぬ、
 一通り其お物語りを聞いて下さいませし、無駄だと思つて御聞き下さいませし先
 方で申しますには御評判の當時宜しい熊澤先生、切望私が娘を嫁に貰
 つて頂きたいと云ふ事其娘の縁綴と云つたれば天女が天降つたやうな女
 で遊藝はと云つたらば琴、胡弓、三味線、太鼓、歌、俳諧、武術は弓、鐵砲

棒、槍、其他カツボレ、チツチヨコチヨイ、ドンガラガン、サイコドンく、
 チツベケル、何んでも遣りますさうで御食祿は三千五百石、此方様と同じ
 御高でございます、切望熊澤先生に御貰ひ申して頂きたいと斯う申しま
 すんで、其所で私が申したんでゲス熊澤先生の所へは毎日く九人十
 人宛婚禮申込みがあります片ツ端から断はつて居りますそれでも言込
 んで来ますから御門の所へ縁談御断はり申し候夫れでも未だ言込んで来ま
 すから支關の片端へ家来が一人机を叩へて縁談断はり役と云ふのが出
 来て片ツ端から断はつて居ると斯う申しました』と一人でペラ〜と喋つ
 だが、いかになりますことやら、例により次回のお楽しみに……。

○第十五席

蕃山變名を名乗らずして罪あり
 良縁結ばれて未だ全からず

寛大な先生は笑ひながら「和郎は虚言斗り吐いて居る、爲んな虚言を吐くものじゃ無い。幸マア御聞下さいまし、夫れでも先方様も御武家様貴郎も御家様何時所で逢うまいものでもございませぬ、萬一御逢ひに成つた時に先方が貴郎に御逢ひなつて時に熊澤先生、刀屋から話したいなりました。一はと斯う成りました時に私は其んな事を聞きませんと云ふと私に御得意をしくじりますから御耳へ通して置きます。丁成程、幸其所でおひなさるも御貰ひなさらぬも夫りやア貴郎御勝次第、エ、如何でございませう。丁夫りやアア念の入つた事だ何方の御方だ。幸霞ヶ關の黒田様の御家來で三千五百石……」次郎左衛門黒田の家來と聞いて前に進みんで、「丁ウムー。幸アノホラ御家に騒動がありましたして御諫言を申し上げて御暇に成りました、尤も殿様が御妾に迷つて入しつたもんでござい

ますから御聞入れなさらなかつたのでございませぬ、其故忠臣は遠ざかると云ふやうな譯で家内を引纏めて京都に暫く浪人をしてお出でなされた由ですが今度殿様が切腹して御家が治まつて御歸參に成りました方で私は古くから刀劍類で御出入りをして盡く御最貢に成つて居ります。丁ウム名前は……何んと云ふ。幸矢部執刃と仰つしやる文武兩道に秀で居る其お姫子で深雪様と云ふお方でございませぬ。丁ウム、じやア京都の岡崎村に居た方だな。幸左様でございませぬ。段々前に進み出るから可笑いと思つたが、丁シテ何にかい其矢部と云ふ方には大勢子供衆があるのかい。幸夫りやア何んでゲス、深くは存じませぬが深雪とおつしやつて一人だそうでございませぬ、何れマア極く處女娘でございませう、なか／＼承はる所親孝行者ださうで何うせ無駄ではございませうがお耳に達し

まする萬一其矢部鞆負様に御逢ひに成りましたらば拙者は少し心願筋があつて刀屋幸三郎から委細は聞いたが御断はり申すと斯う何うか被仰つて下さいまし私に饒舌り損で……二十五両に……二十五両棒に振つちま

つたんでございますから好うございます』と聞いて彼の熊澤次郎左衛門了海に於ては左も嬉し氣に『了然うか……外の縁談なれば御断はり申すが幸三郎矢部の深雪とあれば辱け無い、私は貰ひたいと思ふに由つて切望取極めて貰ひたい、早速結納の取替せをいたしたい、和郎宜しく頼む矢部の方へ話しを爲て呉れるやうに』幸三郎は大きに驚きまして『幸へエ……』

……と是れやア妙だ眞實でございますか『了眞實所じやア無い』幸實地で……『了武士に二言は無い』幸なんと云つて私に悦ばして置いて實は心願の筋あるなんと被仰るんでございませう、何うも心願の筋

だの疝氣の筋なんてへものは不可ません、エ、喰べて骨の出るやうな筋は不可ません筋は日本橋の神毛の筋に限りませ、又心願筋があるんでございませう『了イヤ今日迄は心願筋があつて断はつて云つたが矢部の娘とあるからにやア貰はう、鞆負どのにも宜しく申して呉れ、天地の神に誓つて玉椿の八千代掛けて貰う者は矢部の娘ばかりである』幸へエ……何うして貴郎が然う云ふ思召しに御成んなすつたんでございませうか、シテ見ると深雪と云ふ娘を御案内でございませうか『了ナニ乃公は知つてる理由は無い』幸『左様でございませうか早速御返事をいたして参りませう』と云ふ事に成つた、是れが何う云ふ理由で行違ひに成つたと云ふと野尻先生が悪い、奈是悪いかと申しまするに私に京都の下河原に居て野尻阿蘇次郎と云つたものだ矢部鞆負の方に申してやれば幸三郎も然う云ふから斯んな手違ひ

には成らなかつた、唯熊澤次郎左衛門斗りて野尻阿蘇次郎とは被仰らんから
 幸三郎が知る道理は無い、大きに悦びまして早速霞ヶ關の矢部の屋敷
 へ取つて返しまして 幸「扱て旦那様私は唯今往つて参りました 靱負」
 イヤ今和郎が来るやうてい好い返事に違ひあるまい 幸「好い返事にも何ん
 にも二十五兩に二十五兩の……一件で福徳の三年目でございます 靱負」
 何んと云つた先方で…… 幸「大名小路の熊澤先生方へ参りまして
 靱負「何んと云つた……そう」と前に乗出して来る 幸「マア旦那様悠然
 御聞き遊ばせ 靱負「貴様が急て居るんだ 幸「先づ私が玄關へ掛つて
 お頼申しますと斯ふ申しました 靱負「然んな事は何うでも好いから 幸「
 マア御聞きなさいましよ、其所で先立ていふ刀をと云つたもんですから是
 れへと遂々御目に掛りました、夫れでなければ縁談断り役に断はられて仕

舞います、デマア段々と其次第を話しますといや私は心願筋がある
 から……斯う申しましたから私が段々説付けてじやア貰はうと云ふ事
 に成りまして…… 靱負「待て……夫婦の間柄と云ふ者は無理に先方を説
 付けたの無理に承諾を爲すのと云ふ事では永く治まりが付くもので無い
 夫れを所謂媒酌口、桂庵口と云ふもので左様な事では予の方で娘を遣
 はずことが出来ん 幸「イエ……マア御待ちなすつて……何うも五十兩
 の一件がありますから今更然んな事を仰せられては大變でございます、じや
 アマア眞實にお話しを致しますが 靱負「眞實の話しを爲るが好い 幸「扱
 て私が熊澤様へと参つて鳥渡話し掛けますと了海先生の被仰るには
 幸三郎和郎にも似合ない縁談の事を持ち込んで困るじやア無いかと斯う了
 海先生が被仰いますから夫りやア私も存じて居ります、然し無駄だと思

つて御聞下さいまし御先方も御武家様のことと何時なんとき何所彼所でか御逢ひなさるか知れませんかから其時貴郎が熊澤さん貴郎の所へ斯ういふ事を申し込んだ事が有りませうと云ふ時に知らぬと仰せられると私か御得意な縮尻りますから御貰ひなさらないならお貰ひなさらないで宜しい一通り御耳に入れて置きますと夫れから此方のお話しをいたしますと云ふと盡く御悦こびなさいまして蒲團の上からズリ出して参りまして福岡の矢部靱負の娘とあれば玉椿の八千代迄末の末かけて私の妻に爲たい……… 靱負「夫りやア重疊だ眞實か 幸「眞實にも何も先方で實以て乗氣に成つてお出でなさるのでござります 靱負「然ふか 幸「へ且旦那御褒美金を頂戴仕りたものでござります 靱負「然うか、約束通り遣はす、其方の御陰で當時世間に名の高い熊澤先生を我娘の良人にいたしたと云へば乃公も肩

身が広い、大きに御苦勞でありました」と二十五兩の金子を遣はす、幸三郎嬉し悦んで 幸「誠に有難い是れで私が橋渡しでござりますから私には御婚禮の當夜は三々九度の目出度いお座敷へ招れかれて出るんでございませうなア 靱負「ア、勿論其時には和郎には是非來て貰はなければ成らん 幸「エ、時に熊澤先生の方から如何程か御禮を下さるでございませうなア 靱負「夫りやアあるだらう 幸「夫からマア御娘さんから幸三郎大きに骨折りだつたと云ひて如何程か下さるでございませう 靱負「然んなに怒張るな 幸「夫れからマア御親類からも幸三郎御苦勞であつたと又御禮がございませう、夫れからマア刀屋幸三郎「云ふ者が橋渡しを爲たと云ふ事が評判に成つて御出入りが出来やうと云ふ譯なんでござります、誠に有難う存じます」と嬉し悦んで立歸りました、扱て矢部靱負どのも盡く

御悦び遊ばして委細の趣きを書面にして國表へやりました、其所で奥様が深雪を呼んで、母「扱て阿父さんが斯う云ふ次第で、和女を熊澤次郎左衛門と云ふ方の所へやる、其熊澤様と云へば、岡山の政治を改革して殿様の御亂行をお正しなすつたと云ふお方、嘸嬉しからう』と云ふに下俯向いて何んとも云はん、結納取替せも濟んだと云ふ事であるに由つて早速其仕度も爲んければ成らん、深雪が「深」有難う存じますが兩三日御猶豫を願ひます、何んと無く氣合が悪うございますから……と云つて居る、譬へ如何なる事があらうとも氣合が悪ういと云へば詮方が無いから、母「然んなら女と云ふ者は人身の大禮御婚禮、モ一度往つては二度とは出て来る者で無いから残る方無く笹井の天満宮、箱崎の八幡様に參詣をして緩るゝ保養をして然うして行く事に御極めなさい三四五日の間は其儘にいた

して置きました、サア夫れからと云ふものは深雪に於ては一間の内に深くも籠りまして只泣く斗り、深雪「ア、一妾程不運の者は無い那れ程御約束をして野尻先生が何う云ふ譯で御手紙を下さらぬか、御病氣でもあるか知らん、妾が心の内で良人と極めた其人は野尻先生の外に無い然るに今熊澤次郎左衛門と云ふ人の所へ嫁入りを仕ては濟まん、此りやア何んと爲たものであらう』と唯クヨク案じて居る斗り、深「此りやア一層京都下河原へ往つて野尻先生に御目に掛り相談をして事を爲やう』と斯う考へて繪圖面を取替して見ると筑前から京都までは漸く三寸斗りつきやア離れて居ない、繪圖だから然んなものでありますけれども扱て夫れがたやすい所じやア無い、固より深窓に育つた所の深雪何辻然んな事を知りませう、恰好十四五日籠つて居りましたが何う爲ても堪らなく成つて來た、又一方からは未だかく

と母親に迫られますので爰に遂に思ひ追つたものと見へて或夜家内の者の寢静まつたのを窺ひ、振袖の儘夜中何う爲たか屋敷を拔出でまして京都までは何程あるか分りませんから唯女の一生懸命、住馴れたる故郷を跡にいたして何所を何う歩いたが三千五百石の御娘さん、一生懸命に三里か四里来たと思ふ所で夜はホノノと明渡りました、スルと向ふから空ッ籠を擔いで來つたる所の二人の男

甲「チイ棒組和郎はモ一歸つて直ぐ寢るのが乙「然うヨ如何様きたくつたつて睡くつちやア詮方が無へ、夫れア鳴アが蒲團を暖ためて待つて居るから早く歸つて寢てやらすばなられへ」甲「ヤイ〜良も爲ると鳴アの惚氣を抜しやアがる眞當に氣に成つちまうぜ、だが汝エの鳴アは鳥渡した女だなア

乙「和郎の前だけれども先づ何所へ出したつて鳥渡耻かしく無へ女だなア

甲「此の二本棒め、夫れだから間男を爲れるの

だ』と下らぬ事を云いながら此所へ來掛りまして目早くも深雪を眺め

甲「ヤイ〜向ふから來た女ア見や好い女じやア無へか

乙「成程此りやア素晴らしい別嬪だ日高川の清姫みてへな風を爲て居る……モシ〜お娘さん

ん 深雪「ハイ

乙「和女さん何所へお出でなさるんで

深雪「ハイ京都の下河原と云ふ所へ参ります先へ行けば御禮をいたしますが切望京都の下河原へ妾を載せて往つて下さるやうに……

乙「ナニ京都、夫りやア大變だしどうも明日や明後日行かれる所じやア無へ、マア好いからお娘さん此方へ御寄んなさい」と一人が深雪の手を取らんと爲る

深雪「アレー和郎方は何を遊ばします御覽の通り女一人の便り少ない者切望御載せなすつて御連れ下さいまし御禮は何のやうにもいたしますから

甲「マアサ和女が載せて呉れると云ふなら跡で載せても進げますが先づ小俺共を二人先へ載せてお

呉んなせへ』と既に猥かましき事を爲る。深雪『アレー……』と逃げんと爲る後から 甲『エ、静かに爲る、何うせ乃公達の目に這入つたからにやア逃げやうたつて逃がしやア爲れへ、サアツタバタ爲すに乃公達の云ふ事を聞なせへ 深雪『切堅左様な事を被仰いませんで御許しなされて下さりまし』と大地へ手を突いて謝罪する時に五十五六に成らうと云ふ男物をも云はず突然一人の駕籠屋の横ッ面を毆倒して 男『エ、何を爲やアがるんだ此奴等ア、夜でもあるか此通り夜が明けて往來の人があるに憚りも無く飛んでも無へ奴だ』と兩人の此ッ面を七八つ毆打りましたに由つて二人は大きに驚き駕籠を引擔いでドン／＼逃げて仕舞う 甲『姉さんマア怪我が無くつて能うございましたねへ』深雪はプルプル震へて大地に打伏し手を合せ 深雪『何所の何誰様かは存じませんが既に危ない此場の仕儀御救ひ下し置かれまして

有難う存じまする 男『イヤ禮を云ふには及ばねへ、肌を穢しやア爲ませんでしたか 深雪『ハイ何んとも致しやアいたしません、何うも何共御禮の申しやうもございませぬ 男『ナニ、御禮には及びませぬ、既に累卵ねへ所でございまして』と云ひながら彼の男は深雪の顔を見て喫驚いたしましたと云ふは何う云ふ理由か次回に……。

○第十六席

貞庵諸方を流浪す
婦人を托されて岐路に迷ふ

お話し跡へ戻つて爰に京都三條に居りましたる元備前岡山に居つた頼間醫者の貞庵でございませ計らずも舊主人なる勇仙に廻り會ひ餘義無きことを頼まれました聞届けなければ其筋へ訴へると云ふ、訴へられれば夫れだけの罪がありますから大變だ、と云つて矢部の所へ是れが野尻阿蘇次郎でこ

ぞいますと云つて行けば矢部の爲、又野尻の爲に濟まない、板挟みに相成り
 まして何う爲ることも出来ませんから遂々家財道具を残らず賣拂ひまして何
 所とも無く逃失せましたが其後大坂へ出まして別に爲る事もありませんか
 ら相變らず安宿に泊つて居る内に朱に交はれば赤く成る、早晩しが悪い手慰
 みを覺へまして今日は何所の博奕場だ明日は那所の花會だと云つて遊んで
 歩きます内に遂々蓄への金子は残り少く宿屋に泊つて居ることも出来ず
 又三度の物を三度喰へる事も出来なく相成りましたに由つて今は殆んど何う
 爲ることも出来ない、小人親すれば此所に濫す或日の事心齋橋筋を歩い
 て来ると右側で大きな商人がある、見ると質兩替店でザラ／＼金子の勘
 定をして居る是れをテラと見まして 貞ア、一那の金子が欲しいなア、那
 れだけあれば當分の間は何不自由も無く最と安樂に送れることであるう、

ア、一慾いものだ』と思ひ立つてはなか／＼我慢が出来ない、爰に遂に悪心
 を起しまして 貞『好いや人間僅か五十年だ長へ浮世に短けへ命、一番那
 の金子を奪つて久し振りで好い正月を爲やう』と太い奴で其夜の丑三ツ頃
 に裏手の垣根を破つて小便所から忍び込み、だん／＼見世へと來つて見ます
 と今は唯妍きの聲のみである 貞『占めた』と貞庵密と帳場の格子の内
 へ忍び込み、今抽斗を明けやうと爲ると一人の手代がフト目を覺して見る
 と、大の男が抽斗を明けやうとして居るから 若『泥坊……』と一聲
 掛けました、貞庵は驚いて回顧つて見ると一人の男が今起上つて居る
 から 貞『エ、毒を喰やア皿だ、覺悟を爲る』と差して居つた刀を突然に
 抜きヒシ／＼切つて掛る、肩先深く切倒されましたるから何かは以て堪る
 べきアツ……』と其儘倒れました此物音に一同は目を覺して 男『ソレ

曲者ツ……』と云ふ騒ぎ、流石の貞庵も未だ眞實の度胸がありませんから其儘裏口から一物も取らずに逃げて仕舞ひました。貞ア、失策つた最初から骨折り損の疲れ儲け、飛んだ目に逢つた』とこぼしく其夜は宿屋へ立歸りましたが残念で寝られない、サア此探偵が殿しく相成りましたから大坂に居ることも出来なく成り、其儘アーイと大坂表を立つて行くとも無しに故郷の方へだんく来りましたが扱て身を寄すべき所も無い、然し未だ一兩二分半り懐中にありますから 貞エ、儘ヨ、國へ往つて勇庵にでも捕まつた日にやア詰られへ寧その事九州の方へでも往つて知られへ土地で氣樂に世を送つて見やう』とスタく遣つて来て播州加古川迄来りました、スルと是れも同じく旅の者、四十二三の男に二十二三の鳥渡濫ッ皮の剥けた女、旅馴れた者と相見へまして身拵の作り迄もキリツとして居る、貞庵が

急ぎ足で歩くと又其兩人も急ぎ足で歩く、悠然と歩くと彼二人も悠然と歩く、反圃道で小便を爲ると彼れも小便をいたしますから變な奴だ、殊に由つたら大坂から跡尾をして来た手先で、もあるかしらんと傷持つ足の悲しさは何んと無く氣味が悪く成つて来た 旅人『モシく其所へ行く御方……』貞庵は知らぬ顔をしてスタく行く 旅人『モシ其所へ行く御方 貞ハイ何んでございます 旅人『貴郎も御見受け申す所是れから未だ長旅をなさらうと云ふやうな御身拵だが何方へお出でに相成ります 貞私 は別に長旅と云ふ程でもございませんが九州へ参らうと思ひます 旅人『九州へ……』 貞『ハイ 私の弟が大宰府と云ふ所に居る筈ですか未だ確かに居るか何うだか其所の所は分りませんが夫れを便つて参ります 旅人『ハア然うですか私も肥前の小倉と云ふ所へ行く者でありますが何んと貴郎、旅

は道連れ、世は情け、斯うやつて旅をしても女房杯と一緒に歩いて居たん
 じやア話しもありません、又外の方と一緒に歩くと話しが變つて宜うござい
 ます御一緒に御出でに成つちやア何うでございます 貞成程、イヤ仰せの
 御言葉御道理千萬一緒に参りたいものでございます 旅人「左様ですか、じ
 やア御一緒に参りませう………時に貴郎は御産れは何方でございます 貞
 私に鳥取でげして十二の時に鳥取を出て備前の岡山に暫く居りました
 男「ハア、然うですか 貞貴郎は何所でございます 男「私は唯今も云
 ふ通り肥前の小倉が故郷で………此りやア私の女房でございます 貞
 失禮ながら大層お若い御内儀さんで……… 男「お耻かしい譯ですが是れの
 姉が私の女房でしたが昨年死んで其所で其妹を貰ひました理由………
 貞成程御羨やましようございますなア何うも……… 甲「エ、お早い御着

き様で御泊り様じやアございませんか 乙「エ、御泊り様じやアございませ
 んか和泉屋市兵衛は手前でございます 丙「糸屋吉兵衛は私方で………
 男「モシ、貴郎モ、今日は泊らうじやアございませんか 貞然うでゲス
 な、泊りませうか 男「然う爲ませう………おぬいやサア泊らう、何所が好
 い ぬい「妾は何所と云つて始めていございますから貴郎の泊り付けがござ
 います 男「サム、夫れじやア此先に大松屋新兵衛と云ふ者がある、那れ
 へ往つて泊りませう」と三人は遣つて来て 男「アイ御免 亭主「チャ是れ
 は六兵衛様貴郎誠に暫くでございました何時もお變り無く………毎度御最
 負有難う存じます 六「イヤ和郎さんも何時も御變りが無くつて結構だ、今
 日は同行三人だヨ 松「へい………コレお洗足を上げなヨ」洗足を出す、
 足を洗つて上へ昇がり二階座敷へ通りました 六「コレ女中や風呂が好かつ

たら案内をして呉れヨ。女「畏まりました。六「此りやア少ないがホンの茶代だ……是れは和郎に進げるヨ。女「誠に有難う存じます。傍で見居た貞庵腹の内、恐ろしい氣前の好い奴だか何んだらう、商人のやうじやア無しと云つて職人じやア無し何んの商賈だらう、怪しい所もあるやうだ。杯と思つて居る内に、女中「お風呂が宜しうございます」と云ひながら風呂へ這入つて御膳付の他に二タ品斗り貰つてさしつさ、一杯飲みまして御飯を喰べて仕舞つて。六「扱て貞庵さんとやら貴郎は御身受け申す所が長袖らしい御様子がある、夫れとも商人ですか何んでございます。貞「エ、御目が高いことで、實に何を隠しませう。私は醫者で、少筋の悪い事があつて國表を飛出して來ました。六「何國にお出でなすつたので。貞「ハイ京都に居りました。六「京都……京都と云へば私が月に一度位宛に行

く所だ、何所でゲス。貞「三條に居りました。六「三條に……ハア左様でゲスが御儀さんは。貞「女房杯はありやア爲ません。六「然うですか。貞「シテサ、失禮な事を云ふやうですが貴郎は何御商賈でございます。六「イヤ私の商賈は分るまい。貞「一ツ當て、見せませうか。六「イヤ當りますまい。貞「商賈で無し、御職人で無しと……遊女屋の方へかいはつた御商賈でござう。六「サム……此りやアなかく感心だ、何所に分ります。貞「別に此所に分ると云ふ事もありませんが貴郎の如才の無い所と氣前の好い所、萬事に抜け目の無い所は何う見ても夫れとしか外に見へません。六「然し遊女屋に掛はつて居る商賈も澤山ありますが何んだか御存じですか。貞「夫りやア何うも分りません。六「斯うやつて一ツ釜の飯を喰合つた以上は別に何にも隠すには及びませんから正直に云ひ

ますが何を隠しませう私には人買ひです 貞「へー……人買と申します
 と六「餘まり自慢の商賣じやありませんが先づ人買と云ふと人がそい
 のかして来た娘を安く買つて女郎屋に賣り、又自ら然う云ふ娘を探し
 て女郎屋に叩き賣る天下法度の商賣でございます 貞「エ、……
 六「イヤサ然んなに驚くにやア及ばねへ、男杯は何う爲る事も出来やア爲
 れへ、マア九州へ行くなら一緒に交際つて下さい、あぶく錢を取る商賣故
 決して和郎さんに散財を掛けやア爲ませんから 貞「イエ決して怖れるの何んの
 と云ふ事は無い、私は然う云ふ商賣の方が好きです、實は私は突然國
 表を出て来たもんですから蓄へとも充分に持つて来ません切望私を一
 緒に連れて往つて下さいまし」飛んだ好い尾取が引つ掛つて来たと思つから
 嫌な商賣だとは思つたが自分に錢が無いから詮方が無い、先づ此人に尾で

行つと斯う考へて其晩は泊まり、翌日も一緒に道々もいろいろな話した爲
 ながらだん／＼とやつて来て恰好日を重れて周防の岩國と云ふ所へ参りま
 した 六「貞庵さん私は岩國へ来たのは始めてだ、何うだい錦帯橋と云
 ふ橋を一ツ見て行きてへもんだが明日は一日逗留を爲ませう 貞「結構で
 ございますれ、私も飛んだ御厄介に成りましたがマア切望太宰府迄行けば
 如何やうにも御禮をいたしますから御連れなすつて…… 六「ナトニ好い
 決して心配をなささん、な明日は一日逗留を爲ませう」と其翌日は岩國
 の名所舊蹟を見物して歩きました其夕方歸つて来て 六「ア、一疲勞れ
 たと湯へ這入り御飯を喰べて寝る、其晩が大熱で六兵衛動く事が出来ない
 兩人「サア大變だ」と云つて兩人は大きに驚き、醫者ヨ薬ヨと立騒ぎ宿屋
 の亭主にも話を爲て金子は京都へ賣物をして来て未だ五十兩斗りあると

云ふから金子に明かして介抱を爲た、貞庵も脈を取つて外の醫者共々介抱を爲て遣つて居る内に病ひは次第々々に重る斗り、或日二人を枕許へ呼びまして、六「扱て貞庵どの、おぬい二人にながく介抱を掛けて實に禮の述べやうも無い分けて貞庵どのには一方ならぬ御介抱此御恩は必らず忘れはいたさん、けれども私の命はモ一逆も助からない今度が此世の別れかと思ふに由つてモシ貞庵どの誠に御氣の毒ではあるけれども此おぬいは女一人なかく一人で長旅は出来ぬ、和郎小倉へ連れて往つてやつちやア下さるまいか、貞ア、夫りやア御易い御用だ、同じ九州の内何んの雜作があるもんじやア無い、然し然んな氣の弱い事を云はず病ひは氣で持つと云つて氣一ツのもの故にナリニ斯んな病氣なんぞと心を大きく持つて早く癒つて下さい、今の若さに然んな氣の弱い事を云つちやア成りません、六「イヤ、一勵

みを付けて呉れても今年は四十二の厄年、何うせ助からない命だから跡を頼むと云ふ聲も次第々々に細りまして其夜遂々是れは息絶えました、おぬいは旅で便りに爲る良人に別かれ唯泣て居る斗り、傍から貞庵が勵げまして金子で宿屋の主人に話し、宿屋の菩提所へ葬むつて貰ひ、七日々々の供養をして扱て廿一日目に此所を去つて小倉へと向ひました、道中の一條は次回のお楽しみ……。

第十七席

毒婦亦た涙あり
深雪邊路に迷ふ

去る者は日々に疎しとか近頃ではおぬいも少しは機嫌の好い時もある、貞庵が考へたるは、貞待てヨ此女ア未だ廿二三だ、見た所が中々の美人、今便りに爲るのは乃公一人、一ツ口説て見やう、乃公の様な者だからと言つて